

トスカーナ折半小作地帯の最近における変貌

— ヴァル・ディ・キアーナにおける事例研究⁽¹⁾ —

竹 内 啓 一

一 問題の所在

農村景觀 (paesaggio rurale) あるいは農業景觀 (paesaggio agrario) という言葉⁽²⁾を用いて、トスカーナ、ウンブリア、マルケ、それにエミリア・ロマーニャの一部をも含む地域を中部イタリアとして一括し、そこにおいて、いくつかの形態が、生産力および生産関係に規定されて共通の構造をかたちづけているということが指摘されるようになったのは、第二次大戦後のことであり、地理学の分野でのデプランク (Desplanches, H.)⁽³⁾、農業史の分野でのセレーニ (Sereni, R.)⁽⁴⁾を緒にすると言えよう。筆者も、これら先達の業績に導かれて、若干の事例研究や比較研究を断続的にしてきたのであるが、⁽⁵⁾そこで一般的に指摘されてきた要素の結合は、図式的に示せば、「散居——農家とそれを取り囲む農地との固定——所有および保有地のまとまり（非細分化）——折半小作制——農業への專業化——混合耕作（各農家の農地 (podere) および耕地片 (particella 又は parcella) 内での多種栽培）——肥料および動力のための牧畜」ということであつた。勿論、これはあくまで一般的図式であり、とくに最後の「肥料および動力のための牧畜」という要素

は、すべての折半小作——混合耕作の地帯について言えるとはかぎらない。また、ディ・ピエトロ (Di Pietro, G. F.) などによって指摘されているようにトスカーナなどでは、上記のような構造は、平野・丘陵にあって、歴史的に都市の影響の及んだ地帯に見られるもので、これとコントラストをなすものとして、山地あるいは都市から遠隔の地帯には、「集村（多くは小村状の塊村）——所有地および保有地の細分と散在——小土地所有農民の卓越——農業への部分的就業（とくに季節的な非農業部門への就業）——食料生産（乳製品および肉）のための牧畜」というもう一つの構造が存在するのである。歴史的には、都市の管理上および資本面でのイニシアティブの下に、テラスの造営をはじめとする土地改良がなされ、複数の折半農の管理中心そして剰余が徴収される場所としてファットリーアがつくりだされていったのであるから、ファットリーアを欠く折半小作農地帯を遷移地帯として、都市から遠隔の地帯に見られる第二の構造は、折半農制とポデーレを伴う農家との導入前の集落の要素を多く残すものであると言えるかもしれない。トスカーナ、ウンブリア、マルケなどの山地には、Castello, Castra, Palazzo, Villa などの名前に示されるように、一領主の農奴からなっていた小集落⁽⁸⁾が多く、断片的に知られている歴史も、このことを示しているが、集落の形態、そこにおける社会・経済生活が、平野・丘陵部に、折半小作制を成立せしめ、その構造そのものを変質させた数百年の過程と無関係に残存し続けたわけでは勿論なく、特に前世紀以来の過程の中で、たとえば、混合耕作の山地への普及、牧羊経済の衰退、共有地または公有地 (demanio) の分割、人口の急激な減少⁽⁹⁾というかたちで、大きな変化を経験したのである。この点で、ディ・ピエトロによる二つの類型化された構造の対置は、示唆に富むが事柄を単純化させすぎているきらいがある。

さて、ここで検討するのは、前者の構造のトスカーナにおける最近の変化である。ウンブリアについて、いわゆる折半農制——混合耕作景観について詳細に検討したデブランク⁽¹⁰⁾が、すでに一九六〇年代の末に指摘したように、この変

化は、トスカーナに限らず、中部イタリアにおける第二次世界大戦後における折半農制の危機と経済的統合へむかつた西ヨーロッパ内部における地域間分業の再編成、その中における中部イタリア農業の変貌の過程に対応するものである。

トスカーナの折半農制については、ヴァル・デイ・ニエヴォレにおける土地所有者でもあつたシスモンディの十八世紀末における牧歌的な礼讃論⁽¹¹⁾にはじまり、十九世紀前半を通じてジョルゴフィリ・アカデミーを中心にして、貨幣経済の浸透と農産物価格の下落傾向に対して、折半農制をどのようにして維持していくべきかについて、多くの議論が展開され⁽¹²⁾、農法の改良、ファットリーアの役割の強化などが進行した。この近代トスカーナ折半農経営の性格に関しては、折半農民のプロレタリア化、ファットリーアの生産的役割の増大を認めるか、それとも、折半農の経済的地位の向上をともなつたかたちでの折半農制の発展を見るかに関しては、セレーニ、ジョルジュエッティなどの見解とパッツァリの立場との間には論争があるが、この問題は、本稿の主題をなすものではない。

折半農制の危機⁽¹³⁾ということが言われながら、それが十九世紀を通じて発展したことは、パッツァリの最近の研究⁽¹⁴⁾によって数量的にも確認できるし、トスカーナ全体で、一八三〇年頃約五万あつたポデーレのうち、一万二千がファットリーアに組織されていたのが、一八五〇年には、これが一万五千に増大したというデータもある⁽¹⁵⁾。この数字が意味するところをトスカーナ全体についてさらに議論することも必要であろうが、トスカーナ内部における地域的相違を念頭におきながら、実証的事例研究をつみかさねていくことが、現在の研究状況からみて、まず必要であろう。本稿で検討するテーマからすれば前史に属するのであるが、ここでは、近代トスカーナ折半農経営の構造について、一般的・図式的な理解を前提にすることなく検討をすすめることにしたい。

イタリア統一後、農学者、経済学者、知識人の折半小作制に関する議論には、明らかに変化が生じてくる。折半小

作制に対するいわば神話の誕生であつて、たとえば一八七四年のソクニノの文章⁽¹⁶⁾では、家長 (capopecio) を中心とする折半小作農が、非常に安定していて、土地改良にとつても好ましい結果をもたらしていることを、いくつかの実例をあげながら示している。しかし、ソクニノに代表される折半小作農神話を仔細に検討して、注目しなければならぬのは、(一)そこであげられている事例が、ほとんどの場合、葡萄またはオリヴの栽培が大きな比重を占めている経営であつたということ、(二)ファットリーア経営を当然の前提としていて、小規模な、あるいはポデーレが散在するような限界的経営の土地所有は、折半小作制であっても考慮の外に置かれていたこと、(三)資本主義的借地農 (affittuari capitalisti) が、まだ出現しない地帯と段階とにおいて、折半小作農は、分割地農民 (小規模な自作農) や経営の安定しない小作農よりすぐれている、すなわち「折半小作制は、一つの移行段階として有用なのであり、耕作者のもとにおける資本形成を容易にする⁽¹⁷⁾」ということが主張されていたこと、(四)同時に必ず主張されていたのが、折半小作制の下においては、他の諸国において見られるような農村における社会問題、ストライキや労働組合結成の危険がないということ、以上の四点である。すなわち、アレツツォ、リヴォルノ、グロッセツト、シエナ諸県のように、一八三〇年から一九二九年の間に混合耕作の形で植樹面積が大幅に拡大した地帯⁽¹⁸⁾において折半小作制の強化が進行したのであり、十九世紀トスカーナ折半小作制においてはファットリーア経営が、土地所有者にとつて有利なものとして展開されたことがわかる。フランケッティ、ソクニノの如きジャーナリスト出身の政治家、あるいはバストージ家の如き金融業、中央政治で幅広く活躍した人材をうんだ貴族など、十九世紀トスカーナの指導者階層は、いづれも、十九世紀を通じてファットリーア経営を拡大していたのである。

農村における社会問題の発生をおさえ、農民の繁栄に役立つという折半小作農神話にもかかわらず、十九世紀後半、トスカーナ各地の折半小作制地帯で、折半小作農の貧困に由来するさまざまな社会問題が発生した⁽¹⁹⁾、一九〇二年キ

アンチアーノにおける農民暴動⁽²⁰⁾にはじまり、二十世紀に入ると、土地所有者側がいくつかの譲歩を余儀なくされるような事態にまでな⁽²¹⁾った。

北部労働者階級には若干の譲歩がなされたジロリッティ体制の下でも、中部イタリアの折半小作制に関しては、法制上の改革措置は何ら取られなかった。社会的矛盾の激化という現実にもかかわらず、いや、矛盾が激化したからこそ、折半小作制の神話は、ファシスト体制の下で生き続けた。一九四二年に改められた民法においては、收穫物の折半が、資本と労働との調和のある同盟を実現する契約であることが明記された。

第二次世界大戦後のイタリアの経済・社会条件の根元的な変化の中で、古典的折半小作制の成立以来数百年の歴史を有するトスカーナ折半小作制が、本格的な変革の波にさらされることになった。第二次大戦後のトスカーナにおける折半小作農による農民運動は、一九一九年のそれほどのひろがりをもつことはなかったが、エミリア・ロマーニャにおける共産党指導下の活潑な農民運動の影響をうけて、一九四七年六月土地所有者側と農民組合との協定が成立し、折半農の取り分が、五〇パーセントから五三パーセントに増大し、さらに、土地所有者は、取り分の四パーセントを、土地改良、すなわち土地に合体する資本にさかなければならないことになった。マルケ、ウンブリアにおいても事態はほぼ同様で、土地所有者側の実質的な取り分は約四〇パーセントになった。

第二次大戦後の折半制土地所有者の立場の弱体化は、折半小作制地帯における農民運動の激化、左翼政治勢力の強化⁽²²⁾だけによるものではない。反ファシズム統一戦線の経験を経て第二次大戦後のイタリア共和国の政治的主役になったキリスト教民主党から共産党にいたるまでの諸政党は、その政治的、経済的意味あいは違っていても、農業政策において自作農創設主義の立場をとった。自作農創設主義に反対したのは、キリスト教民主党内の少数派と自由党、あとは右翼の小政党にすぎない。キリスト教民主党を主体とする政府によって第二次大戦後実施された農業改革は、

なによりも農業生産力の上昇による国内市場の拡大をめざし、裸の播種⁽²³⁾地のみを対象にした部分的改革の性格をもつもので、中部イタリアではマレンマ山地にしか改革公団は設置されず、トスカーナの混合耕作がかなりの比重を占める折半小作制地帯は、農業改革の直接の対象とはならなかった。しかし、ここでも小農民または直接経営者が折半小作地を購入するための金融上のさまざまな措置が制度的に購せられ、折半とは名のみで、一九六四年には、地主の取り分は四二パーセントになり、かつ、一九六四年九月十五日の法律は、新たに折半小作契約を締結することを一切禁止するにいたった。

このようにして、中部イタリアにおいて数世紀にわたって鞏固に存在し続けた折半小作制は、一九五〇年代を通じて急速に弱体化し、一九六〇年代に、その崩壊は決定的になり、一九七〇年の農業センサスでは、コミュニネ単位の公表されたデータでは、農家の経営類型の分類では、それまであった折半小作経営は廃止されて「その他」の類型に入れられてしまっている。⁽²⁴⁾ イタリア全体で一九五〇年から一九七〇年の間に、折半小作経営の数は一八パーセントに減少したが、折半小作経営の卓越する中部イタリア、とくにトスカーナにおけるその減少は、さらにドラスチックで、農業経営体数が四二パーセントに減少した中で、折半小作経営の比重は、経営体数で六七・五パーセント、面積で六九・二パーセントであったのが、それぞれ一四・一パーセント、一一・六パーセントに減少したのである。⁽²⁵⁾ 農業改革、あるいは土地改革をうたった政策がおこなわれることなく、土地制度が、これほど急激に変わったのは、世界でもまれな事例であると言えよう。

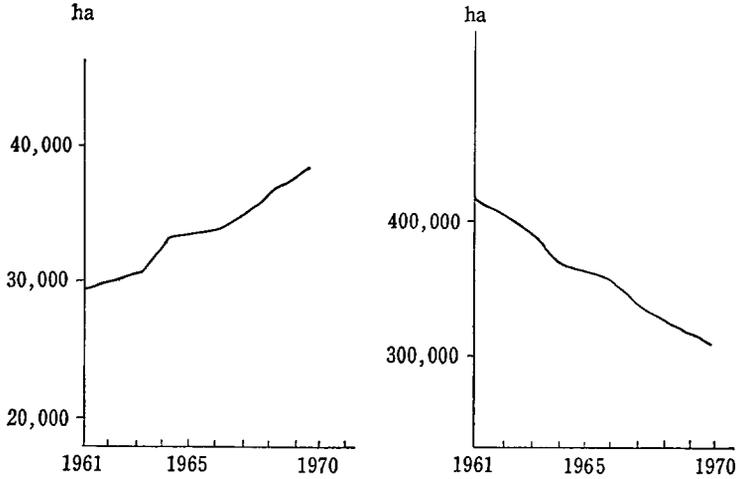
しかし、変化は、生産関係における折半小作制の衰退にとどまるものではない。百年前に、ソンニノ⁽²⁶⁾が、明らかに北部ポー河流域の先進的農業を念頭に置きつつ、より進んだ経営が形成されるまでの過渡的な形態としてその存在意義を積極的に評価した折半小作制であったのであるが、その後の百年間に、とくにトスカーナにおいては、折半小

作農のもとにおける資本蓄積、折半小作農の上昇的發展は進行しなかった。今世紀はじめになると、土地所有者自身が、「折半小作制は、勤勉で賃金の前払いを要求しない労働者を確保し、我々に欠けている資本をさらに投下することなく経営を続ける唯一の手段である」⁽²⁷⁾ことを認めるようになっていた。すなわち、農業生産力の發展をはかることなく、折半小作農を、現物経済の部分を残した低い生活水準におしとどめる制度であったことを告白するにいたったのである。

この低生産性と直接耕作者の貧困の問題が顕在化したのは、第二次大戦後、とくに西ヨーロッパの経済的統合の展望が明確化してくる一九四〇年代末葉の頃からである。さきに指摘したように、第二次大戦後のイタリアの体制の主流が自作農創設主義をとるに至った大きな理由として、西ヨーロッパの経済的統合を前にして、イタリア農業が、開放経済体制のもとで破滅的影響をこうむらないようにすることと、イタリア北部に偏在したものであれ、イタリアの工業が、それなりの規模の国内市場を基礎にして、国際競争力を備えるためには、中部や南部の農民を、従来のような低所得水準にとどめておくわけにはいかなかったことがあげられる。第二次大戦後になって、イタリアは、体制の主流がグラムシのいう土地ブロックの利益をきりすてる段階に到達したのである。

したがって、第二次大戦後における中部イタリアにおける農業問題は、さきに指摘したような、直接耕作者と土地所有者との政治的地位の逆転のみにとどまらなかった。E E C体制の実現と、「奇跡」とまで言われたイタリア経済の復興と繁栄のもと、一九五〇年代末葉から労働力の流動化（または、第二次大戦後のイタリア経済の成長のための労働力の動員）が進むのにつれて、一方では相対的に恵まれない農業地域からの人口の流出が激化した。また、穀物・野菜と、葡萄・オリーブなどの樹木とが同一耕地片内で栽培される混合耕作は、折半小作制の下での土地所有者の利益のための労働集約的な経営を可能にする土地利用形態ではあっても、樹木栽培農業、穀物栽培農業、いずれの観点

第1図 トスカーナにおける混合耕作耕地面積(右)と
葡萄専用耕地面積(左)の推移



(資料) Piccardi, S. (1972). ISTAT: Catasto Viticolo (Rilevazione al 25 ottobre 1970) Volume I, Tomo 1, 1972.

からしても生産性の低いものであった。物理的にみても、一耕地片の中に、多年生の樹木が植えられ、その間で一年生の穀物・野菜等が栽培される混合耕作耕地は、農業機械の導入⁽²⁸⁾に対して大きな障害になった。有利な換金作物、とくに工芸作物の導入および機械化の可能な葡萄の専用畑の実現が、中部イタリア農業が、統合ヨーロッパ経済体制の下で存続するためには必要であることは、もはや誰の目にも明らかになった。

第二次世界大戦後のトスカーナについて概略的に言えることは、まず、農民の政治的活潑化、農民運動の昂揚があり、次いで、一九五〇年代後半になって農村からの人口流出が活潑化して、折半小作農の交代の激化、場合によっては、折半小作農が見出されなまま、放棄された家屋 (casa colonica) と耕地 (podere) さえ見られるようになったということである。この傾向は、一九六〇年代を通じても進行する一方、一九六〇年代の後半になると、中央政府および州政府の融資優遇政策もあって、トスカーナ、マルケ、ウンブリアなどの諸州においては、

數百年間、すくなくとも土地所有者階級にとつては、技術的に最も先進的かつ最も高い収益をもたらすものと考えられてきた混合耕作に代つて、コンクリートのパイルを支柱とする葡萄専用畑が急速に普及することになったのである。現在（一九八〇年代初頭）、フランスとのあいだに、いわゆるワイン戦争を展開しつつあるとはいへ、中部イタリアの、キアンティをはじめとする銘柄ワインが過剰生産をかこっているのは、中部イタリアにおける生産関係の変化のみでなく、それに続いて、土地利用、農業技術の大きな変化が生じたからなのである。

このようにして、ここでの問題は、大きく分ければ、生産関係の側面における変化と、生産力、または土地利用の側面における変化との二つである。しかし、すでに指摘したように、中部イタリアまたはトスカーナの農村景観を単純に二つの対立する類型に二分できないのは勿論のこと、局地的なモノグラフィ―研究を蓄積することなしには、中部イタリア、さらにはトスカーナの農村景観あるいは農業景観の最近における変化についての一般的叙述は不可能であろう。

本稿は、外国人研究者によつて、現地の研究者がする研究に比較すれば、時間的にも制約された条件の下においてなされた一つの事例についての報告にすぎない。しかし、土地制度および土地利用に関して、中部イタリア就中トスカーナが第二次世界大戦後経験した変化は、国際的にみても注目されるべきテーマであるにもかかわらず、イタリア人研究者および外国人研究者によるこのような観点からする研究は非常にすくないので、中部イタリア、とくにトスカーナの農村景観の性格を解明するための一つの貢献たりうると考える次第である。

- (1) 本稿は、TAKEUCHI, K. (1982) を骨子として、それを敷衍したものである。上記の論文が限られた部数の、市販されない出版物に、イタリア語で発表されたものであり、また、枚数制限のために、いくつかの重要な論点について、十分に論じつくすことが出来なかつたので、この日本語の論文は、内容に関して、上記のイタリア語の論文と内容が重複していること

を、あらかじめお断りしておく。なお上記イタリア語論文および本稿は、昭和五十五年度文部省科学研究費による海外調査（研究代表者 竹内啓一 課題番号五六〇四三〇二三）による成果である。

(2) 農業 (agrario) という言葉と農村 (rurale) という言葉を用いたのでは、かなり違った意味になるとも考えられるのであるが、この二つの形容詞が、景観 (paesaggio) という言葉に冠せられると、ほとんど同じ概念になってしまう。このことを説明するためにも、また私自身、二十年以上にわたって、農村景観や農業景観という言葉を用いてきているので、ここで、景観、およびそれに関連した概念について必要な註記を加えておく。

「景観」という日本語は、一九二〇年代、ドイツ地理学および地理学、パークレー学派が用いていた *Landschaft*, *landscape* に対する日本語として、日本の講壇地理学の草分け者達によって用いられたのに起源する。ただ、当時あっては、「景域」という言葉も用いられていたし、ドイツ語の日常語としての *Landschaft* の訳語としては、この方が適当であったかもしれないが、辻村太郎などの権威により、「景観」という日本語が定着した。この「景観」という日本語、あるいは *landscape* という英語が与える視覚的乃至形態論的意味合とはかなり違って、ドイツにおける *Landschaft* の研究は、すでにシュリューター (Schlüter, O.) が、前世紀末葉から今世紀初頭にかけて、農業史家マイツェン (Meitzen, A.) の業績から大きな示唆を受けながら *Morphologie der Landschaft* としての新しい地理学を志向した時から、単なる環境論的コンテクストにおけるのではない「形態分析を通じて成因を」という *historisch-genetisch* な研究という性格を強く持っていたのであった。第二次大戦前のフランス学派、たとえばドマンジョン (Dumangeon, A.) における *paysage* やイタリア学派、たとえばピアズツェイ (Biasutti, R.) における *paesaggio* は、これに対してむしろ形態分類への関心に由来するものであった。一九五〇年代に入ってから、文化史的には共通の視点から研究され、その上で比較検討がなされるべきヨーロッパの集落史および集居地理学の研究が、近代民族国家の枠内で成立した各国の学派によって、かなり異なった問題関心からなされていたことに対する反省がなされるようになり、いくつかの国際的研究集会が、現在にいたるまで開催され、さまざまなかたちでそのプロシードディングスが刊行されている。これらの国際研究集会のテーマを順におってみると、一九五七年ナンシー、Colloque International de Géographie et Histoire Agricole (*Annales de l'Est*, n° 21, 1959)、一九六〇年スウェーデンのヴァドステナ、Symposium on

- the Morphogenesis of the Agrarian Cultural Landscape (*Geografiska Annaler*, Vol. XLIII nos 1/2, 1961) 一九六四年ハンコブ・ニンマンガム・レストマー The Rural Landscape and its Evolution (20th International Geographical Congress, *Congress Proceedings*, 1967) 一九六六年ヤナルツブルク Die Genese der Siedlungs- und Agrarlandschaften in Europa (*Geographische Zeitschrift*, Beihefte, 1968) 一九六九年リヒツナ L'habitat et les paysages ruraux d'Europe (*Les Congrès et Colloques de l'Université de Liège*, Volume 58, 1971) 一九七一年ヤンムスト The Geography of Rural Landscape and Settlement in Europe (*Field, Farms and Settlement in Europe*, Uster Folk and Transport Museum 1976) 一九七三年イタリヤのヤンニツト I Paesaggi Rurali Europei (Deputazione di Storia Patria per l'Umbria, *Appendici al Bollettino*, N. 12) と同じ風にならぬ一九七三年までに七回の会合がもたれ、以後は、全ヨーロッパ的な研究集会は開催されていないが、二国間の研究集会、あるいは国内研究集会への外国人研究者の参加がさかんになされている。以上の研究集会のタイトルを見ただけでも、第二次大戦後のヨーロッパにおける文化景観の研究が、もっぱら成因論的関心からなされ、また、全ヨーロッパ的、あるいは旧大陸の西半分全体にわたるスケールでの比較という視点が出て来ていることがわかるのである。このような観点から考察をすすめるとき、農村的 (rural) なものの基礎にあるのは、牧畜と農耕とからなる農業であり、農業というものが、農業集落すなわち農村を社会的、経済的にみて重要な単位としていとなまれるのであるから、農業景観という言葉と農村景観という言葉とがあたかも同義語であるかのように、一見混乱して用いられることには問題がないのである。
- (3) このような観点からの彼の最初の仕事は、Desplanches, H. (1958 a) (1958 b) である。彼は一貫して農村景観という言葉を用いている。

- (4) Screni, E. (1957) (1961) におおむね、彼は、農業史の刻みこまれた形態として農業景観とこの概念を正面に押し出している。セレーニは、ガンビ (Gambi, L.) による報告 (1958) を通じて、ナンシーにおける農業史および農業地理学のヨーロッパにおける研究動向を熟知していたからこそ、一九六一年の著書において、マルク・ブロック (Bloch, M.) の「研究の発展の過程には、多くの分析の仕事よりも、むしろたとい外見上は時期尚早であっても、総合することが一層役に立つ時期、いはいかえると、問題をとくことを試みるよりも、むしろさし当っては問題をうまく提起することがとくに重要な時期がある。農

村史は、わが国では、こうした時期に達しているようである(1952 頁: 邦訳五頁)を引用しながら、一九三〇年代にフランスにおいてなされたような「時期尚早ではあっても総合の試み」が一九六〇年代のイタリアにおいて必要なことを主張したのであった。それまでの環境論的乃至生態論的なイタリアの学界における人文景観の概念の不毛を批判し、歴史主義的乃至成因論的景観概念への転換を主張したガンビ(Gambi, L. (1964) pp. 123-152. この文章が最初に発表されたのは一九六一年である。)も、アルプスの北のヨーロッパに比して、南ヨーロッパあるいは地中海ヨーロッパの農業史および農業地理学の研究が非常におくれていることを指摘したのであった。

(5) 竹内啓一(一九六三)(一九六五)(一九七一)(一九八〇)。

(6) Di Pietro, G. F. (1976) および竹内啓一(一九八〇)。

(7) *fattoria* という言葉は、広狭二様に用いられている。すなわち折半小作制地帯において複数の農地単位(*podere* と呼ばれるこの農地単位は、通常一戸の折半農によって耕作される。すなわち折半農契約の一単位をなしている)の経営または経営地の総体を意味する場合と、そのような複数の *podere* からなる経営地の管理者(*fattore*)が居住し管理事務をおこなう建物および付属施設とを意味する場合とがある。

(8) 通常は、二十軒前後で、礼拝堂か司祭の常住しない教会がある程度である。マルケにおける事例については竹内啓一(一九六三)において考察した。

(9) Di Pietro, G. F. (1976)。

(10) Desplanges, H. (1969)。

(11) Simondi, S. de. (1801), pp. 38-108

(12) Accademia del Georgofili に於ける一八三三年以降、一九二九年に於たる議論は、*La mezzadria negli scritti dei Georgofili* t. I, Firenze La Barbera, 1934, 6, II, Firenze La Barbera, 1935. Bologna Edizioni Agricole, 1936 に於けるあれは、Pazzagli, C. (1973) が著書の第三部で詳細な検討をせよとなつてゐる。

(13) Sreni, E. (1961) (1968), ショマンニャティのものは大部分が Giorgetti, G. (1978) に於て述べられてゐる。Pazzagli,

- C. (1973) (1979). この問題については日本でも堺憲一 (1976) によって適確な展望がなされている。
- (14) Pazzagli, C. (1979).
- (15) Jaquart, J. (1970). ジャックアルは、このデータを「Salvagnoli, A. の記述から得ているようである。」
- (16) Sonnino, S. (1874).
- (17) *Ibid.*, p. 79.
- (18) Pazzagli, C. (1979) の計算によると、トスカーナ全体で、一八三〇年頃のデータと一九二九年の農業台帳 (Catasto Agrario) を比較すると、トスカーナ (マッサ・カララ県および島嶼部をのぞく) で混合耕作面積が五七・一パーセント増加しているが、増加率には、グロッセト県の六九・〇パーセントからピサ県の二二・七パーセントまで、県により大きな違いがある。
- (19) Mori, G. (1955).
- (20) これについては Guicciardini, F. (1907) に詳しい。
- (21) のちにジオルゴフィリ・アカデミーの会員になったバステリーニが、一九〇四年ピサの高等師範学校に提出した卒業論文は折半小作慣行をシエナ、フィレンツェ、ピサの三県の全コムーネについて調査したものであるが、彼がこの研究をおこなった問題意識は、その序文でも述べられているように、小作慣行に変化があらわれはじめており、また改良がなされなければならないという認識に由来するものであった。Pastellini, T. (1980), pp. 11-12.
- (22) エミリア・ロマーニャ、トスカーナ、マルケ、ウンブリアの折半小作農の卓越する地帯は、第二次大戦後の制憲議会の段階から、共産党と社会党の重要な選挙基盤をなしたのみでなく、多くのコムーネにおいて、共産党と社会党とがコムーネ評議会 (consiglio comunale) の過半数を制し、左翼によるコムーネ執行部 (giunta comunale) を形成した。
- (23) *seminativo nudo* すなわち、樹木農業がおこなわれず、また灌漑設備もなげ、古代ローマの農法そのままのドライフマリーミングしかなされえない耕地のことである。
- (24) 州 (regione)、県 (provincia) のレベルでは、折半小作経営 (conduzione a colonia parziaria appoderata) の項目が公表されている。

(25) 統計データは、特に断らないかぎり ISTAT (中央統計局) のセンサスによるものである。一九五〇年のデータについては、INEA (国立農業研究所) による *I tipi di impresa nell'agricoltura italiana, 1951* および *Carta dei tipi d'impresa nell'agricoltura italiana, 1958* において地帯別の分析がなされている。

なお、世界農業センサスがなされるべきであった一九八〇年の農業センサスは、一年延期されて一九八一年になされ、その結果はまた公表されていないので、この研究では利用できなかった。

(26) 「とくにトスカーナにおいて」と断るのは、後述するように、エミリア・ロマーニャでは、事態がやや異なるからである。

(27) Serragli, P. F. (1908), p. 19.

(28) 一九五〇年代においては、葡萄の根元を耕すトラクターや穀物栽培のための農業機械の導入にとつての混合耕作の樹木が障害であったが、一九六〇年代末葉より、葡萄栽培の機械化(収穫、剪定のための農業機械の導入)にとつて、混合耕作がまったく適さないことが明らかになった。

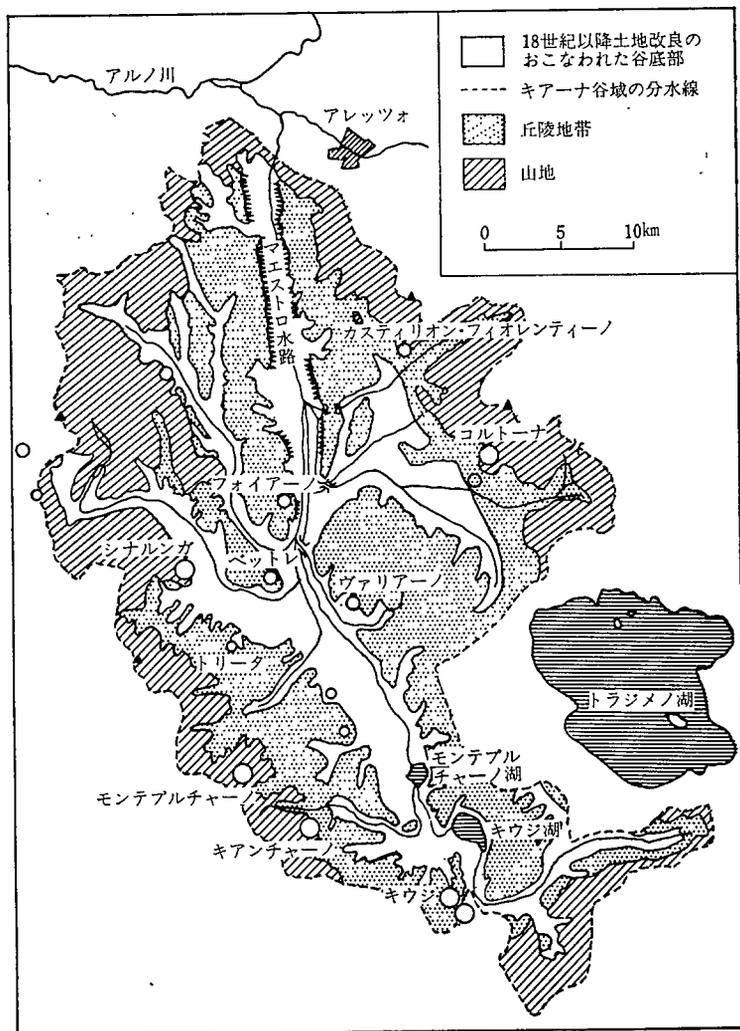
(29) 最近におけるすぐれた事例研究として Fomesu, I., Poggi, C. e Rombei, I. (1979) 'Picardi, S. (1979) などがあ

二 ヴァル・ディ・キアーナ

ここで研究対象としてとりあげるヴァル・ディ・キアーナ、またはキアーナ谷域は、トスカーナの南東部、シエナ県南東部とアレッツォ県南西部を占めている。地形的に見れば、トラジメノ湖を囲む盆地とキアーナ谷域とが一体となつてアペニン山の山列間にあるいくつかの構造盆地の一つをなしているのであるが、トラジメノ湖はキアーナ谷の水系とは区別されるし、何よりも、ウンブリアに属するトラジメノ湖盆地は歴史的に見て、トスカーナとは区別される地域単位をなしていた。

南北に長さ約五〇キロにわたるキアーナ谷は、もともとテヴェレ川の一支谷をなしていたのであるが、勾配がゆる

第2図 地域概念図

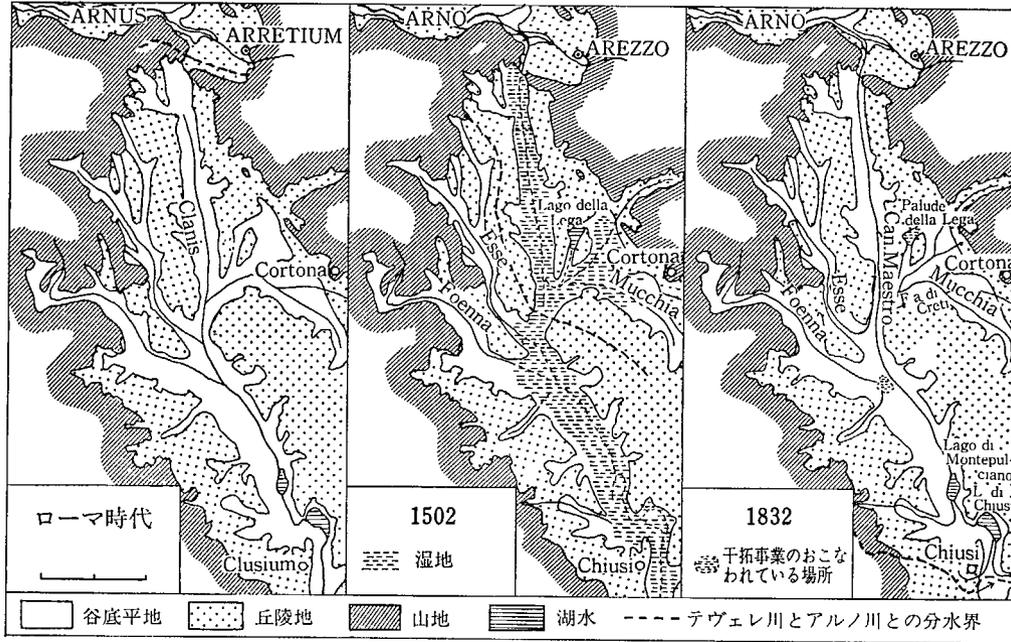


(注) Piccardi, S. (1974) の原図を修正。

やかで、谷底が広大な湿地をなしているこの谷の水を、ローマ市を水害から守るためにも、アルノ川に落とす計画がローマ時代からあったことがタキツウスなどの記述に見られる。一一一五年に、ヴァル・ディ・キアーナの北端に、アルノ水系のカストロ川に水を落とす水車があったことが知られているが、デル・コルトが詳細にのべているように、十四世紀になって、アレツツォおよびシエナのイニシアティブにより、ヴァル・ディ・キアーナの北部において、湿地を干拓して農耕地を拡大する試みが開始された。⁽³³⁾しかし本格的な干拓が開始されたのは、十五世紀になってフィレンツェの手によってであり、一五〇二年のレオナルド・ダ・ヴィンチによる図では、ヴァル・ディ・キアーナの谷底全体が広大な湿地におおわれているが、キウジの南でテヴェレに注ぐ水路とならんで、アルノ州に注ぐ水路がはっきり確認される。一五二五年には、谷の中央部のフォイアーノの干拓が、イッポリート・デ・メデイチによって開始され、十六世紀末には、現在もその名を冠して存在している幹線排水路、マエストロ水路(Canale Maestro)⁽³⁴⁾が谷の中央部にまで達した。一六三五年に、ヴァル・ディ・キアーナ全域を干拓する計画が立てられ、その実現の可能性をめぐって、大公国内部で議論があったが工事はすすめられ、十九世紀前半、レオポルドの時代には、現在のように、モンテブルチャーノ湖とキウジ湖とを遊水池として残して、谷底部全体の干拓が完了したのである。しかし、東側および西側の山地からの急流による堆積作用が著しいため、イタリア統一後も、谷底の耕地を湿地化から守るための排水路の拡大、新設の工事は絶えず続行されたのである。

このような干拓の歴史から明らかなように、谷底部の居住は、周辺の丘陵、山地部に比して新しく、谷底の沖積土の部分には、折半小作農の建物(casa colonica)が散在するだけで、集居部は、丘陵、山地部に限られている。フォイアーノのコミュニネ全体、あるいは、シナルンガのベットレ、モンテブルチャーノのアックヴィヴァなどの集落のように、干拓がなされるのにつれて人口が急増しているのがわかるが、これは、散居部分の人口増加、すなわち折半小

第3図 ヴァル・ディ・キアーナの流域変遷



(注) 原図は Piccardi, S. (1974) でこれを、ローマ時代のものは、Canestrelli, G. (1909), 1502年のものは、Leonardo Da Vinci の図 (Gimori Lisci, L. Carabrei in Toscana, Raccolte di mappe prospetti e vedute sec. XVI-sec. XIX. Cassa di Risparmio di Firenze, 1978, p. 153, に収録), 1832年のものは Atlante geografico, fisico e storico del Granducato di Toscana di Attilio Zuccagni Orlandini (Edizioni 1832) を Cassa di Risparmio di Firenze が 1974年に復刻したものの Tav. IV によって若干修正した。

ヴァル・ディ・キアーナ各コムーネの人口

1871	1881	1901	1911	1921	1931	1936	1951	1961	1971
6,120	6,073	6,641	7,049	7,479	7,924	8,126	8,147	6,673	6,683
7,975	7,875	8,408	8,658	9,171	9,154	9,537	9,489	7,950	7,464
2,571	2,612	2,677	2,716	2,771	2,900	3,020	2,970	2,084	2,044
12,935	12,756	13,318	13,470	15,150	13,967	14,830	14,766	11,889	10,845
4,052	4,091	3,973	4,111	4,193	4,223	4,305	4,250	3,526	3,223
7,615	7,692	7,703	7,698	7,678	7,743	7,990	8,036	7,141	7,171
26,263	26,381	29,296	29,659	30,262	30,451	31,518	31,910	26,718	22,653
8,889	9,039	9,734	9,682	9,873	10,297	10,411	10,838	11,345	11,274
4,719	4,753	5,279	5,635	5,541	6,163	6,304	6,678	6,469	6,753
13,160	13,256	15,384	15,365	16,067	16,570	16,866	17,365	15,820	14,356
2,469	2,626	2,886	2,987	3,079	3,438	3,677	4,548	5,489	6,788
4,660	5,005	5,974	6,337	6,733	7,683	8,043	8,674	8,848	8,771
101,428	102,159	111,273	113,367	117,997	120,513	124,627	127,671	113,952	108,025

作農による居住の展開によるものなのである。

ここでは、ヴァル・ディ・キアーナの居住の展開過程の概観を与えるために、ピカルディにしたがって、レベッティ、バンデッティニ、ズッカーニ・オルランディーニおよび統一後のセンサス資料⁽³⁵⁾に依って、一五五一年以降のコムーネごとの人口の推移を第1表に示すが、教会史料を用いれば、これより以前にまでさかのぼって、かつ教区ごとの人口が得られるはずである⁽³⁷⁾。しかし、この表からでも、フォイアーノやマルチアーノのように、コムーネ領域内において干拓の進行にともなって農地が増大したコムーネをのぞいて、十九世紀はじめ一八一八年まで、人口はかなり停滞的であったことがわかる。以後人口は、一九五一年まで、ほとんどのコムーネで、年間一パーセントを上まわる率で増加し続ける。これは、ヴァル・ディ・キアーナに限らず、トスカーナ全般に言えることで、主として人口の自然増によるものであるが、このようにして増加する人口を吸収しえたのは、さきに指摘したパツァリが実証的に示したポデルレの分割と増加・混合耕作の拡大による折半小作制の再編成・強化⁽³⁸⁾の過程に対応してのことであろうことが、十分推測されるし、あとであげるモンテプルチャーノのヴァリアーノにおけるカベツィーネ・ファットリーアの場合は、一八五〇

第1表 1551年から1971年までの

コ ム ー ネ	1551	1745	1810	1818	1828	1838	1851	1861
Civitella	3,497	3,438	2,508	2,592	4,585	4,962	5,550	5,777
Monte San Savino	—	4,650	5,399	5,641	6,325	7,035	7,246	7,597
Marciano	764	1,422	1,652	1,746	1,930	2,085	2,373	2,400
Castiglion Fiorentino	6,293	6,067	8,590	8,713	9,653	10,531	11,681	12,044
Lucignano	—	3,402	3,264	3,204	3,482	3,571	3,779	3,925
Foiano	2,844	4,597	5,270	5,475	6,232	6,707	7,367	7,605
Cortona	15,371	13,988	18,714	18,210	21,178	23,087	24,398	25,212
Sinalunga	—	4,771	6,073	6,301	7,008	7,783	8,034	8,296
Torrta	—	2,856	3,496	3,357	3,649	3,980	4,004	4,569
Montepulciano	9,125	6,771	8,387	8,722	9,841	10,751	12,284	12,683
Chianciano	—	1,217	1,544	1,853	2,106	2,188	2,394	2,419
Chiusi	—	1,521	2,373	2,659	3,320	3,598	3,848	4,176
VALDICHIANA	—	54,700	67,270	68,473	79,309	86,368	92,958	96,703

(資料) Piccardi, S. (1974).

年代以降のデータであるが、このパツツァリの指摘する過程が、まさに進行していたことがはっきりと示されているのである。この人口増加過程が、決して都市化によるものでないことは、一八六一年から一九五一年までは、シエナ・アレツツォ両県では、一般に、散居部(case sparse)の人口増加率の方が、集居部(Centro adriato)の人口増加率を上まわっていたことから明瞭である。集居部には、職人、商人以外に農業労働者も居住する可能性があったが、散居部に居住するのは、ファットリアに居住する管理者、職人以外には、農民に限られていたのであるから、この過程は、農村居住の稠密化——それに比例する割合での農業生産力の発展を必ずしも意味するものではなくても——に対応するものであったことは明らかである。

一九五一年以降、ヴァル・ディ・キアーナの各コムーネは、チヴィテッラ、トリータおよびキアンチャーノをのぞいて、一貫して人口の減少を示している。これは、かの折半小作制の一般的危機、その結果としての人口の社会減によるものであり、この段階になると、第2表に見られるように、全般的人口減少にもかかわらず、集居部の人口は増加するという形で、都市化が進行している。第4図、第5図に見られるように、農業の経営形態がラディカルに変化する一方、ヴァル・

第2表 ヴァル・ディ・キアーナの散居および集中人口 (1951, 1961, 1971)

コ ム ー ネ	1951			1961			1971			1951年 から 1971年の間の 集居人口増加率
	散 居	小中心	役場所 在中心	散 居	小中心	役場所 在中心	散 居	小中心	役場所 在中心	
Civitella	5,557	612	1,978	3,964	647	2,062	2,952	471	3,260	1.65
Monte San Savino	5,967	976	2,546	4,264	1,103	2,583	2,816	990	3,658	1.44
Marciano	2,022	189	759	1,338	86	660	1,080	146	818	1.08
Castiglion Fiorentino	7,852	2,761	4,153	5,960	1,818	4,111	5,058	1,157	4,630	1.11
Lucignano	2,700	191	1,359	1,981	197	1,348	1,361	251	1,611	1.19
Foiano	4,546	642	2,848	4,002	538	2,601	2,970	617	3,584	1.26
Cortona	19,084	4,082	8,744	13,558	3,487	9,673	9,467	2,985	10,201	1.17
Sinalunga	5,155	1,533	4,150	3,829	1,572	5,944	2,140	558	8,576	2.07
Torrita	3,617	602	2,459	2,843	946	2,680	1,817	549	4,387	1.78
Montepulciano	10,217	794	6,354	8,570	569	6,681	4,542	1,019	8,795	1.38
Chianciano	1,715	75	2,758	1,501	83	3,905	1,358	24	5,406	1.96
Chusi	3,226	558	4,890	2,543	541	5,764	1,697	209	6,865	1.40
VALDICHIANA	71,658	13,015	42,998	54,353	11,587	48,012	37,258	8,976	61,791	1.44
VALDICHIANA %	56	10	34	48	10	42	35	8	57	—

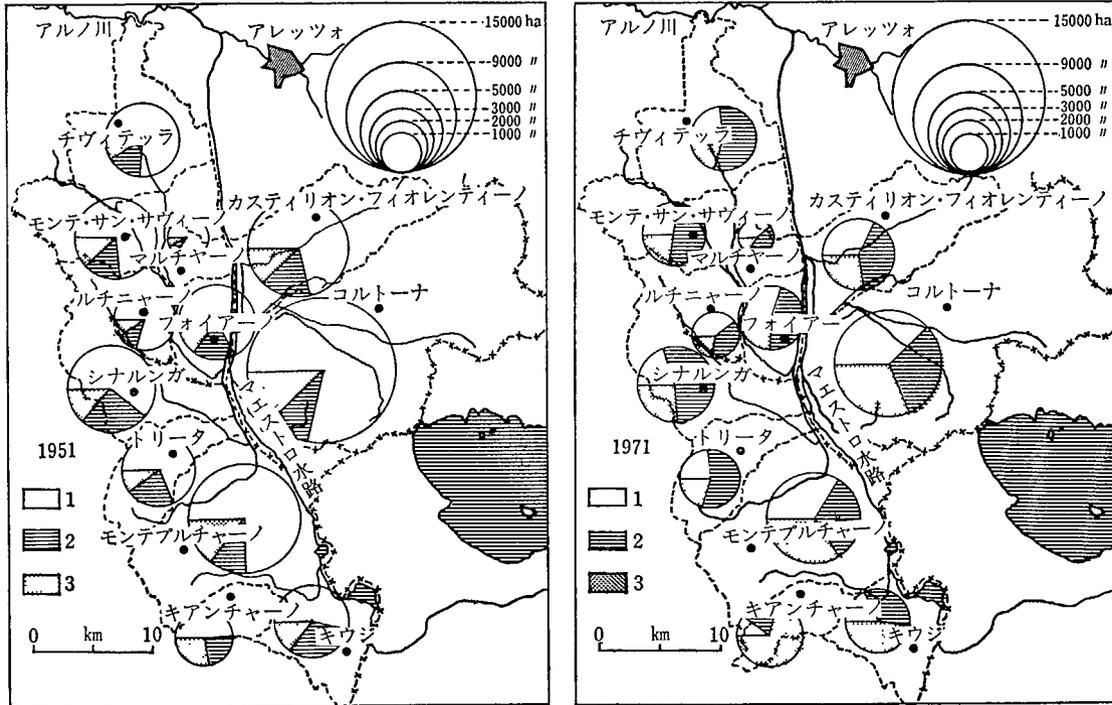
(資料) Censimento generale della popolazione.

ディ・キアーナの産業構造も大きく変化したことがわかる。全般的に農業従事人口の比重が大きく減少したのであるが、一九五一年から一九七一年にいたる変化の様子は、コムーネによってかなりの違いがある。特に顕著なのが、シナルンガおよびトリータにおける第二次産業従事人口の比率の増大であり、キアンチャーノにおける第三次産業人口の比率の増大である。これらは、いずれも交通条件の変化に大きく負っている。一八六〇年代に建設されたフィレンツェ・ローマ間の鉄道幹線が、アレツツォ、コルトナへと迂回したため、ヴァル・ディ・キアーナは、今世紀初頭に完成したキウジ・シエナ間のローカル線が通っているだけで、いくつかの小規模な鉄道駅集落がその結果形成されたのに過ぎなかった。ところが、一九六一年に開通した高速道路 (Autostrada del Sole) は、フィレンツェ・ローマ間の最短路線として、この谷底部を通り、ベツトレ (行政的にはシナルンガに属するが、中心都市として最も近いのはトリータである) に、ヴァル・ディ・キアーナのインターチェンジが設けられ、ここから、シエナ、ペルージャに向かう補助高速道路 (superstrada) が建設されたし、キウジの近くに、キウジ・キアンチャーノのインターチェンジが開かれた。この新しい交通上の利点をいかして、トリータおよびシナルンガのコムーネ当局は、工場の誘致に努め、いくつかの工業が立地するようになったのである。キアンチャーノの場合、一九一九年から、古い中心の西南に、鉾泉集落キアンチャーノ・テルメが発達しはじめていたが、インターチェンジの開設と、トゥーリズム産業の一般的発達傾向との結果として、一九六〇年代に、第三次産業人口の急増をみたのである。

さきの第1表で、一九六一年から一九七一年の間に、トリータとキアンチャーノとが、ヴァル・ディ・キアーナの他のコムーネの一般的傾向に反して、人口が増大し、シナルンガの人口減少率も〇・六パーセントに過ぎなかったのも、このような事情によるものである。なお、チヴィテッラの一九六一年と一九七一年の間の人口増も、コムーネ領域内にアレツツォのインターチェンジが設けられた事にもよっているが、これはもともと農業人口の比重の小さいコ

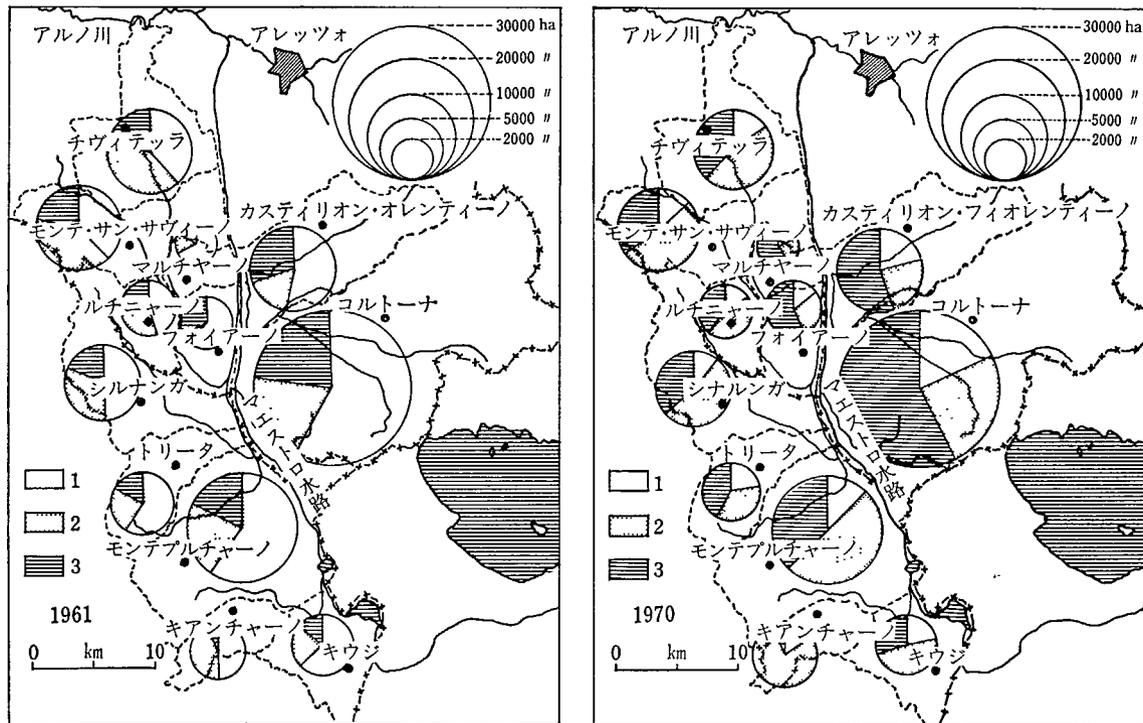
第4図 ヴァルディキアナにおける農業経営形態の面積別比率変化

(1 折半小作農 2 賃労働者による資本主義的経営 3 自作農)

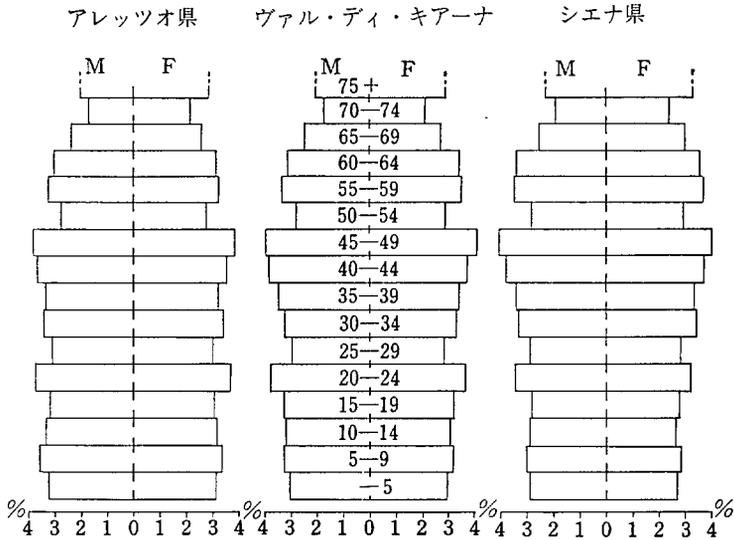


第5図 就業人口の部門別構成

(1 第1次産業 2 第2次産業 3 第3次産業)



第6図 1971年人口ピラミッド



ムーネであり、県庁所在地アレツツォの郊外化しつつあることに、大きくよるものであったと考えられる。

一九五〇年代以降の離農・離村人口の増大にともない、ヴァル・ディ・キアーナは、工業国における衰退農業地域の一般的傾向として言えることではあるが、人口の老齢化を示している。シエナ県、アレツツォ県自体が、北部工業地域への人口流出の結果、すでに、かなりの人口の老齢化を示しているのであるが、ヴァル・ディ・キアーナは、第6図に見られるようにアレツツォ県全体に比しても、若年層人口の比率が小さい。農業の変化を、一九二九年の農業台帳 (Catasto Agrario) の、キアーナ丘陵・平野部 (Colle-piano della Chiana) と分類された地域すなわちヴァル・ディ・キアーナのほぼ南半分に相当するシエナ県について見ると第3表のようになる。一九八一年に実施された第三次農業センサスをまだ利用することができないので、一九七〇年代の変化を数量的にあとづけることはできないが、現地における見聞からはっきりと断定できることは、一九二九年から一九七〇年の間

第3表 キアーナ丘陵・平野部（シエナ県）の農業の1929年と1970年比率

	1929年	1970年
播種面積 (ha)	28,092	20,120
うち混合耕作 (ha)	20,371	12,198
うち工芸作物 (ha)	845	3,620
葡萄専用畑 (ha)	56	1,628
永久放牧地 (ha)	381	855
農家数	4,408	1,902
牛(乳牛および肉牛)	12,097	8,967
豚	20,677	18,511
羊	10,787	4,605

(資料) Catasto Agrario (ISTAT 1934) および 2° Censimento Generale dell' Agricoltura のデータより集計。

に進行した変化——その大部分は、すでにのべたように、一九五〇年以降に生じたものであるが——が、さらにドラステックなかたちで進行したというのである。すなわち、播種面積、とくに混合耕作地面積^(地)が、一九七〇年代を通じて、さらに減少した。混合耕作は、穀物や工芸作物を栽培するための農業機械の導入にとっても、葡萄栽培のための農業機械の導入にとっても、大きな障害になるので急速にとり払われ、これにかわって有利な制度融資を受けて、葡萄の専用耕地が、一九七〇年代に急速に拡大した。これは、葡萄酒の銘柄産地であるモンテプルチャーノなどで顕著な傾向である。農家数が減少するなかで、特に、農業労働者を用いる資本主義的経営農家の占める面積比率がさらに拡大し(第4図にみられた趨勢の進行)、とくに、このような経営においては、煙草、ビート、ひまわりなどの工芸作物、玉蜀黍などの飼料作物の栽培面積が拡大している。これらは、いづれも、大規模な機械化農業が可能な栽培部門である。

牧畜についてみると、ヴァル・ディ・キアーナは、もともと、フィレンツェ風、ビフテキの材料のための肉牛の飼育地として有名であった。イタリア全体において、食肉の消費が一九六〇年以降、急増したのに、とくに中部および南部において、その生産が拡大せず、そのために食肉の輸入が急増したのは、イタリア経済にとっても大きな問題になっていることであるが、良質の牛肉産地として名高かったヴァル・ディ・キアーナにおいても、牛の頭数は、一九七〇年代においても、さ

らに減少したと推測される。牧畜の中で、経営的に比較的安定しているのは、豚の大規模飼育と、数箇のポデーレを永久放牧地に変えて、主としてサルデーニヤ人によってなされている大規模牧羊経営で、牛の飼育は、その低生産性のために、北部イタリアの牧畜および輸入牛肉（仔牛肉をふくむ）との競争において不利である。このような農業の変化の過程を、とくに、折半小作制の崩壊との関連で、さらに詳しく見るために、次には、より小さな村落社会を、事例として取り上げて分析を進めることにする。

- (30) Canestrelli, G. (1909) 牧羊の Piccardi, S. (1974) 牧羊。
- (31) Repetti, E. (1833-46) の Chiana の項の記述に於て。
- (32) Del Corto, G. B. (1898).
- (33) 十九世紀に於ける牧羊の干拓史については Calabresi, I. (1977) 牧羊。
- (34) 当時を Fosse Maestro delle Chiane と呼ばれていた。
- (35) Repetti, E. (1833-1846), Bandettini, P. (1960). Zuccagni Orlandini, A. (1856). ロムーネ単位の統一後の人口の推移をみるには、特にロムーネの境界の変更有る場合、ISTAT, *Popolazione residente e presente dei comuni ai censimenti dal 1861 al 1961. Circonscrizione territoriale al 15 ottobre 1961*. 1967 が便利である。
- (36) ヴァル・ディ・キアーナに関しては、この期間、ロムーネの境界に変更はない。
- (37) 教区教会に保存されていない場合でも、司教区文書館 (archivio vescovile) には殆んどの場合十五世紀にまでさかのぼって住民台帳 *Stato dell' Anima* の写しが保存されているが、戸数・人口を数えあげるのは大変な作業なので、モンテブルチャーノの一部について行なったほかは、調査期間の制約から、ヴァル・ディ・キアーナ全体について調べることは到底できなかった。
- (38) Pazzagli, C. (1976), p. 53, (1979), p. 101.
- (39) Bandettini, P. (1961).

(40) 現在建設中のイタリア式高速鉄道、すなわちフランスのTGVと同様、在来線を部分的に用いながら、急カーブを手直ししたり、いくつかの部分でショート・カットする方式の新幹線の建設が、ほぼマエストロ水路に沿う形で進められているが、このショート・カットの部分は、建設が完了しても、地元には、騒音をはじめとする不便をもたらしても、何の便益をも与えない。

(41) 混合耕作 (*coltura promiscua*) と言っても、葡萄をふくめた複数の種類の樹木が、一つの耕地片に何列かに植えられ、その間で、野菜、穀物が栽培されるというエミリア・ロマーニャのその密度の濃さに比して、ヴァル・ディ・キアーナの場合、大部分が、一耕地片が、葡萄の列に囲まれるか、穀物畑の中にオリブ等が散在するという樹木密度の低いものが多かった。

三 モンテプルチャーノの事例

モンテプルチャーノは、ヴァル・ディ・キアーナの西南部に位置してシエナ県に属し、ヴァル・ディ・キアーナでは、アレツツオ県のコルトーナに次ぐ人口規模のコミュニエである。中心地モンテプルチャーノに、人口の約七〇パーセントが集中しているが、この都市は、ヴァル・ディ・キアーナと言っても、オルチア川流域の分水界に近い標高六〇七メートルの丘の上に位置し、歴史的にみれば、ヴァル・ディ・キアーナ南部において重要な役割をはたしてきた。すなわち、十三世紀から十五世紀の間、シエナとフィレンツェによってその領有が争われ、最終的には、フィレンツェがシエナおよびウンブリアに対して腕を利かす拠点として、行政上・宗教上の中心になった。アックアヴィヴァ、アバディア、グラッチアーノ、ヴァリアーノなどの小中心地(自然村)が古くからあり、モンテプルチャーノ・スタツイオーネ、サンタルビーノなどの新しい中心地が、今世紀になって発展してきた。すでに述べたように、一九五〇年頃までは、中部イタリア折半小作制地帯全体に共通することとして、散居が卓越していて、散居人口の比率は七割

を越えていた。モンテプルチャーノのコムーネ域内には、トスカーナ山地型の農村景観の類型は存在しない。

葡萄酒の銘柄としては、コムーネ全体が、キアンティ⁽⁴²⁾の生産地帯に属するし、さらに、モンテプルチャーノは、モンタルチーノのブルネッロとならんで、トスカーナの最高銘柄と考えられているヴィーノ・ノービレ・デイ・モンテプルチャーノで有名である。白葡萄酒としては、それ程有名ではないが、ピアンコ・ヴェルジネ・ヴァルディキアーナの生産地帯に属する。このように葡萄酒銘柄生産地帯であるということは、一九六〇年中葉以降の混合耕作に代つての専用葡萄栽培耕地の拡大を他の地域におけるよりも顕著にした。専用葡萄栽培耕地の拡大ということは、EC体制の下での地域間分業体制の再編成の一環をなすものでもあったからである。葡萄酒の醸造は、かつてはすべてのファットリーアと、中規模以上の自作農によってなされていたが、現在、銘柄品を製造しているのは、ファットリーアに起源する六軒の酒蔵 (cantina) と、一九五三年に設立された葡萄酒協同組合だけである。葡萄栽培の生産性と生産量は、たしかに上昇したが、他のイタリアの葡萄酒生産地帯と同様、モンテプルチャーノの葡萄酒生産も、現在過剰生産の深刻な問題をかかえている。現在では、葡萄栽培は、決して最も有利な経営とは言えない状態になってきており、丘陵地帯にまで、ひまわりや玉蜀黍の栽培が見られるようになってい

折半小作制の崩壊、ヴァルディキアーナ農業の全般的衰退による農村部からの人口流出は、すでに見たように、ヴァル・デイ・キアーナのすべてのコムーネに共通する現象であるが、モンテプルチャーノの場合、工業化、観光開発などによる新しい雇用機会があまり見られず⁽⁴³⁾、人口流出の度合が、特に著しい。現在の共産党の町長のもとに構成されている共産党、社会党連立のコムーネ執行部も、効果的な開発政策を持ち合わせていない。モンテプルチャーノ全体について、はっきりした数を把握していないが、かなりの数のラツィオ、イタリア南部半島部、サルデーニヤからの農民と牧羊民が、かつての折半小作農のポデーレに自作農あるいは農業労働者として入ってきているので、

モンテプルチャーノに以前から住んでいたトスカーナ農民の離村は、統計上の人口減少が示すよりもはるかに大きな規模で進行したと考えられる。イタリアのように、都市・工業地帯と農村との間に、主として部門間生産性格差に由来する所得格差が存在するだけでなく、農業部門内部にも、所得水準の地域間格差が存在する場合、国民経済の産業構造の変化・工業化の過程において見られる人口移動は、農村から都市・工業地帯に向うものだけではなく、相対的に先進的な農業地帯の人口の、後進的な農業地帯からの人口による置換というかたちをもとり得ることは、理論的な仮設として十分考えられることであり、モンテプルチャーノにおけるいくつかの事例は、このような農村人口の置換が、現実に行進したことを示している。北部農業に比して停滞しているとはいえ、中部イタリアの平地・丘陵部の農業は、南部農業の大部分よりは、所得水準が高いのである。

モンテプルチャーノで見えるかぎり、南部半島部からの農業移民は、経営的にも成功している場合が多く、調査の対象にした約二〇のモンテプルチャーノにおける事例でもまたモンテプルチャーノのいわば土着民、都市および農村に居住するトスカーナ人から、その勤勉さ、協調性などを高く評価されている。すなわち、半島部南部農民の場合、トスカーナ農村社会への同化には、それほど問題がないようである。これに反して、サルデーニヤ人の場合、モンテプルチャーノではまだその数が少ないが、かなりのサルデーニヤ人が牧民として入ってきているシエナ県西南部、グロセット県の場合、サルデーニヤ人による強盗や誘拐がいくつか発生したこともあって、トスカーナ人の側からも、好ましくない連中だという偏見があるし、サルデーニヤ人も、周辺農家との接触をあまり持ちたがらず、しばしば教区の神父の所にも顔を出さない。トスカーナ、とくにシエナ県とグロセット県に、サルデーニヤ人が牧民として多数移住していることは、知られているが、それが、どのようにして入ってきて、どのような生き方をしているのかということは、個々の事例にあたらなにかぎり研究のしようがなく、十年前に発表されたフラッティの報告と、ペルー

ジャ県において調べられたメレリなどによる報告⁴⁶⁾があるぐらいであって、サルデーニヤ牧羊民による犯罪が新聞紙上で派手に取りあげられるのに対して、大部分のサルデーニヤ移民のトスカーナにおける生活の実態はわかっていない。モンテプルチャーノでインタヴューした六つの事例(うち二つはヴァリアーノにおける悉皆調査によるものであるが、他の四事例は、恣意的に、つてがあったなどの理由で選ばれた)についてみると、三つの場合、北部工業都市で出稼ぎ移民として働いて金をため、一九六〇年代に、売りに出していたポデーレを買い、その後ポデーレを買いたしながら、一〇〇頭以上の羊を飼って着実な経営をしていて、周囲のトスカーナ農民の評判も良いが、これだけの事例からモンテプルチャーノにおけるサルデーニヤ人全般を云々することはできないし、どのようにしてモンテプルチャーノに土地を買う金を作り出したのか見当のつかない、何か暗い過去を想像させるような事例もいくつかある。しかし、南部半島部からの移民とサルデーニヤからの移民のこの相違は、基本的には、両者の生活様式の相違にあるようである。南部半島部からの移民が農耕民で、現在モンテプルチャーノで展開している農業は、トスカーナ農民がしているのとそれほど変らない基本的には同じ土地利用方式であるのに対して、サルデーニヤ人は、サルデーニヤでしていたと同様の牧羊経営を持ちこみ、⁴⁷⁾モンテプルチャーノのような丘陵地帯にやって来た場合は、トスカーナ農民がしていた穀物栽培や混合耕作とちがって、大部分の耕地を永久放牧地に変えてしまい、耕地として利用する場合にも飼料作物を栽培する。また、収穫後の他人の耕地に入牧料を払って放牧するため、しばしば家畜を連れてかなり遠方まで出かけるので、農閑期でも昼間は在宅せず、近隣者と接触する機会も、またその必要もない。しかし、三つないしそれ以上のポデーレを用いた牧羊経営は、特にペコリーノ・チーズを自家製造するようになるのと経営的にも安定しており、このような成功したサルデーニヤ人がトスカーナ農村社会に同化するのには、時間の問題に過ぎないであろう。丘陵部では、このようにして耕地が永久放牧地になったり、あるいは混合耕作の行なわれていた耕地が、下は雑草

第4表 モンテプルチャーノの経営規模別農家数

	総数	1 ha以下	~5 ha	~10 ha	~20 ha	~50 ha	50haをこえるもの
1929年	1823	594	366	324	399	127	13
1971年	1280	196	542	265	160	69	48

(資料) Catasto Agrario. および 2^a Censimento Generale dell' Agricoltura.

の茂るのにまかせて、せいぜい古い葡萄の木からわずかの収穫をあげるだけの状態になったりして、土地利用が粗放化している場合もあるが、モンテプルチャーノでは、土地の生産的利用が完全に放棄された耕地は皆無に近い。イタリアでは、一九七八年の法律四四〇号によって、各州に生産的利用が放棄された農地を強制収用する権限が与えられたが、トスカーナではこの法律にもとづいて一九七九年十一月の州法第三号によってそのための手続きが定められ、一九八一年二月、各コムーネで対象地の調査がおこなわれたが、モンテプルチャーノでは数ヘクタールを数えるだけであった。耕作放棄が広範にみられる南部諸州では、まだこのような州法が制定されていないのに、トスカーナでは、このような州法が作られていること自体、トスカーナでは、生産的利用の放棄がまだ例外的な現象であることを逆説的に物語るものである。

一九五〇年頃まで、自作農が、比較的に集中して存在していたいくつかの地区をのぞいて、モンテプルチャーノの全農家の約七割、約一三〇〇〇戸の農家が折半小作農であった。経営規模別の農家数を、一九二九年の農業台帳のデータと一九七一年の農業センサスのデータを基礎にして、比較できるように計算し直すと第4表が得られる。ここで注目されるのは、一九二九年に關しても、一九七一年に關しても、この地帯で、経営が成立する最低限と考えられる経営規模五ヘクタールを下まわる農家が、ほぼ半数を占めているということである。ここで必要経営規模五ヘクタールと言っても、その意味は、一九二九年と一九七一年とは非常に違っている。一九二九年の場合、平均八・一人の家族構成の折半小作農が、負債を残さずに農業だけで、生存線ぎりぎりの生活をしていくのに必要な耕地面積であり、一九七二年時点で五ヘクタールと

言えば、平均三・四人の家族員の小作農が、家族労働だけに依拠して専業農家として、最低賃金水準の工業労働者に匹敵するだけの生活を何とか続けられる経営規模である。現実には、現在（一九八〇年）五ヘクタールの経営規模で専業自作農として存在しているのは、ほとんどが年齢四十五歳以上の高年層を主要な農業従事者に行っている。

一九三〇年、モンテプルチャーノの農業就業人口八九七一人中、一九七〇年は、農業を従とする兼業農民であったが、一九二九年の農家数の過半数を占める五ヘクタール以下の零細経営農家の構成員が、農業を主としてはいても、ファットリリア経営あるいはその他の場所で、日雇い（*braccianti*）あるいは労働者（*operai*）として、農外所得を得ていたことは、かなりたしかである。⁽⁴⁸⁾そして、全農家数に占める折半小作農の圧倒的比率から見て、このような、農業だけでは食べていけない零細な経営が折半小作農の中にもかなり存在していたことが推定されるのであり、このような折半小作農の一般的貧困こそが、一九五〇年代以降の、折半小作制の危機、そしてその急速な崩壊の根本的原因であったと考えるべきであろう。

ファットリリアが、折半小作制において果たしていた重要な役割は、すでに指摘した通りであるが、第二次大戦前の農業調査（一九一〇年および一九二九年の *Catasto Agrario*）においても、第二次大戦後の農業センサスにおいても、ファットリリアというカテゴリーでのデータはない。それが折半小作農の管理、地代としての収穫物の徴収と加工に限られているかぎりでは、ファットリリアは農業経営体（*azienda agricola*）ではないし、直接経営地を持ってはいれば、一つの自作経営体（*Catasto Agrario*）における *conduttore di terreni propri*）または賃金労働者を雇用する資本主義的経営体（*Censimento Generale dell' Agricoltura*）における *conduzione con salariati e/o compartecipanti*）と分類されるにすぎない。モンテプルチャーノにおいて、ファットリリアが、どのようにして存在し、土地所有に關して、それがどのような推移をたどって衰退したかを見るためには、シエナの土地登記事務所（*Ufficio Tecnico Era-*

riale di Siena) と公証人記録を調べなければならぬし、小作関係については、ファットリーアの記録を個別に當て調べなければならぬ⁽⁴⁹⁾。今回は、モンテプルチャーノのコミュニネ領域全体について、このような調査を行なうことはできなかったが、二万五千分の一地形図⁽⁵⁰⁾、および六葉からなる五千分の一の行政図⁽⁵¹⁾上における地名の検討、それを補っての、何人かの旧折半小作農の話から推定すると、モンテプルチャーノに関しては、ファットリーアと呼ばれるものが、一九三〇年代に、一五から二〇ほどあったらしい。一五から二〇と数を確定することができないのは、ファットリーアというのは、社会的な呼称であり、いくつ以上のポデーレを経営していればファットリーアと呼ぶかというはっきりした基準がなく、四戸から五戸ぐらいの折半小作農を持つ場合、これをファットリーアと呼ぶかどうかは、人によって違っているからである。ファットリーア所有者のうちモンテプルチャーノの人は、八人乃至一〇人であった。全折半小作農のうち、約八割の一〇五〇戸が、この一五乃至二〇のファットリーアにくみこまれていたようである。残りの折半小作農は、小規模な土地所有者と契約関係にあるか、隣接するコミュニネにポデーレの大部分を持つファットリーアに属するものであった。この一五乃至二〇のファットリーアのうち、現在伝統的なファットリーア経営を続けているものは皆無であり、土地所有者が突たり法人組織になったりして、大規模な企業的直接農業経営管理所^(七例)、あるいは酒蔵^(Cantina) ^(五例)、場合によっては酒蔵を兼ねるレストラン^(二例) などのかたちで、ファットリーアの建物そのものは残っている場合が多い。

次に、モンテプルチャーノの古くからの小集落ヴァリアーノにあった一つのファットリーアの事例を分析することによって、折半小作制地帯の変化の過程を、さらに詳しく考察することにする。

(42) Chianti Classico ではなく、Colli Senesi を付けて呼ばれるキアンティである。

(43) これらはごまかれも D・O・C (Denominazione di Origine Controllata) の指定を受けた銘柄で、モンテプルチャーノで

生産される葡萄酒の半分以上は、これらの銘柄を付さないテーブル・ワインとして消費されている。

(44) キアンチャーノにあやかって、キアンチャーノに近いサンタルビーノに、鉱泉場を設け観光発がいくらかなされているが、あまり成功していない。モンテプルチャーノの旧市街は、キアンチャーノに滞在するお客にとつての、恰好の日帰りコースになっている。

(45) 後で検討するヴァリアーノ以外においては、悉皆調査をしていないので、正確な数を示すことはできないが、ヴァリアーノ以外でインタヴューをおこなった二九の農家中、一九五〇年以前からモンテプルチャーノに住んでいたのは一三戸にすぎず、一九五〇年以降ラツィオ以南の南部半島部から来たのが、一二戸、サルデーニヤからが四戸であった。シチリアからの農業移住者はモンテプルチャーノには居ないとのことであった。

(46) Furati, F. (1972).

(47) Melelli, A., Montilli, G. Perari, R. e Rambotti, F. (1976)

(48) Furati, F. (1972) も指摘しているように、牧草の生育条件はサルデーニヤよりトスカーナの方が牧羊経営にむいている。
 (49) 残念ながら、日本で言えば第一種兼業に相当するものを数量的に確定する統計資料はないが、現在モンテプルチャーノに残っている何人かの旧折半小作農の話からもこのことは確かめられたし、次節で検討するヴァリアーノのカベツイーネ・ファットリーアの、各小作農ごとの帳簿(貸借簿)からも、分益小作農が、ファットリーアの直接経営地の農作業や醸造などの加工作業に、雇われていたことが確認できる。

(50) 一八〇〇年代にまでさかのぼって、モンテプルチャーノの全ファットリーアの土地所有状況を調べあげるためには、おそらくシエナの土地登記事務所に一年間は通いつめなくてはならないであろう。今回の調査では、土地登記台帳は、ヴァリアーノの旧カベツイーネ・ファットリーアについてしかあたることができなかった。モンテプルチャーノの全ファットリーアのリストのようなものが、さまざまな文書が、極めて混乱した状態のまま保存されているモンテプルチャーノの町立古文書館(Archivio Comunale) のどこかにあるかもしれないが、この宝さがしのような作業も、系統的にすれば尨大な時間がかかり、かつ宝が必ず見つかるという保証はない。またファットリーアの記録は、一般に旧土地所有者のもとにあるが、調査の許可を

第5表 ヴァリアーノの人口の推移

年	集居部	農村部	計
1799	192 (52戸)	329 (56戸)	521 (114戸)
1841	209 (61戸)	660 (74戸)	869 (135戸)
1890	242 (65戸)	818 (114戸)	1,060 (179戸)
1955	453 (129戸)	953 (138戸)	1,410 (267戸)
1960	354 (121戸)	798 (136戸)	1,152 (252戸)
1969	329 (103戸)	428 (107戸)	757 (210戸)
1970	326	462	788
1980	228 (85戸)	424 (124戸)	652 (209戸)

(資料) 1970年のデータは、ISTAT, Censimento Generale della Popolazione, 他はすべて教区教会保存の Stato dell' Anima (Archivio Parrocchiale di Valiano) による。政府のセンサスでは居住者と見做される一時的出稼ぎ、学生などを教区神父は居住者と見做していない。

得るのは困難であり、また、すでにかなり多くのものが処分されたり散逸してしまったりしている。

(50) Istituto Geografico Militare による。

(51) Rilievo aerofotogrammetrico S. T. A. Firenze で一九七五年航空写真からの製作が許可されたもの。

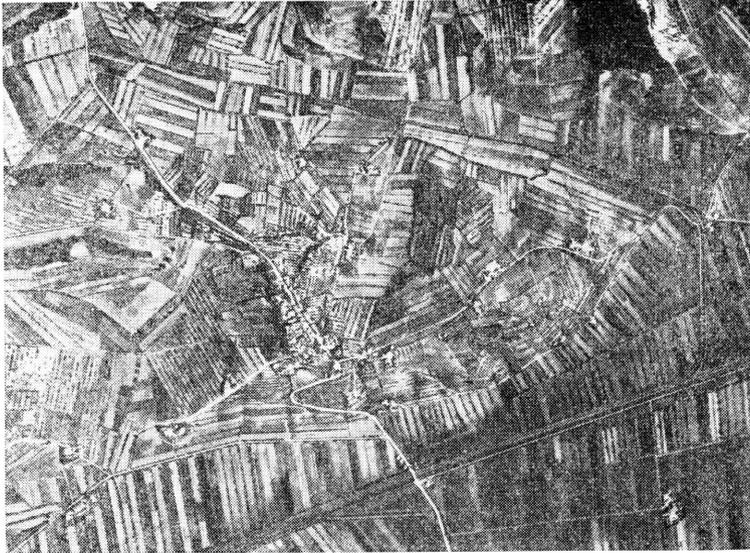
(52) モンテブルチャーノに耕地の大部分がある場合のことであって、ファットリリアの位置は、コモーネの領域外のこともある。

四 ヴァリアーノ、とくにカベッツイーネ・フ

アットリリアの場合

モンテブルチャーノの一地区 (Frazione) をなすヴァリアーノは、シエナ県の領域が、アレツツォ県とウンブリアのペルージャ県とはさまれて三角状につき出た部分をなし、マエストロ水路の東側に位置してモンテブルチャーノの最東部になっている。歴史的に見ても、ウンブリア勢力に対するトスカーナ領の先端部分として重要な役割をはたしてきた。⁽⁵³⁾ 標高三四八メートル、谷底のマエストロ水路との比高が丁度一〇〇メートルの丘の上に位置する中心地は、教会と七六の敷地が壁に囲まれていて、この種の農村中心としては珍しい防禦的な形態をとっている。この教会に保存されている住民台帳から、すくなくとも一九一五年までは、この壁の外に宅地が拡大す

写真1 ヴァリアーノの航空写真



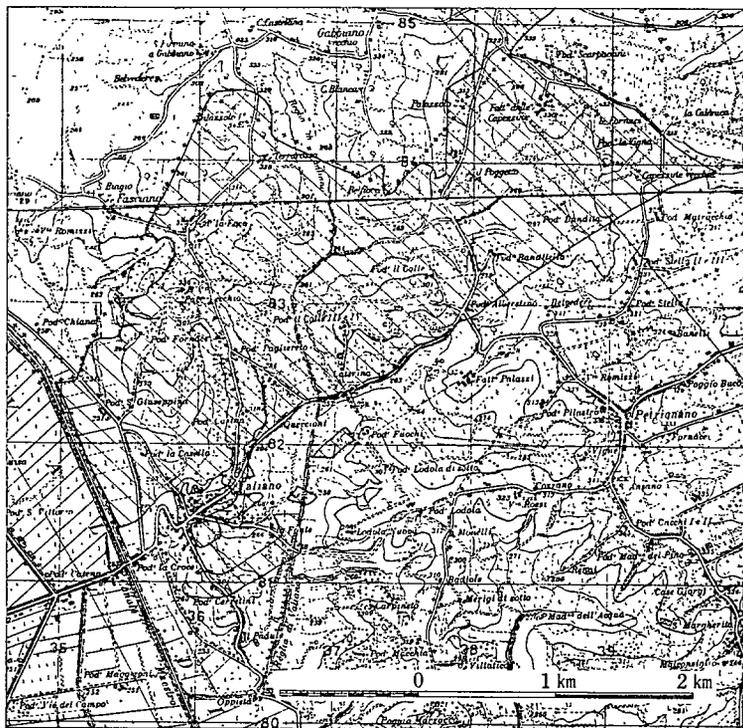
0 500 1000m

この写真がとられたのは、1954年10月13日であり、丘陵部のほとんどの耕地が樹木（葡萄）の列で囲まれる数列の樹木をもち、混合耕作が卓越していたことがわかる。平地を直線状に切っているのがマエストロ水路である。（Istituto Geografico Militare, Firenze, の航空写真）

ることはなかったことが知られる。⁽⁵⁵⁾そして、壁の外に、本格的な住宅、商店が多く集まるのは、一九五〇年代以降のこと、一九五四年の航空写真（写真1）と一九六四年の地図（第7図）とを比べてみても、これを知ることができる。

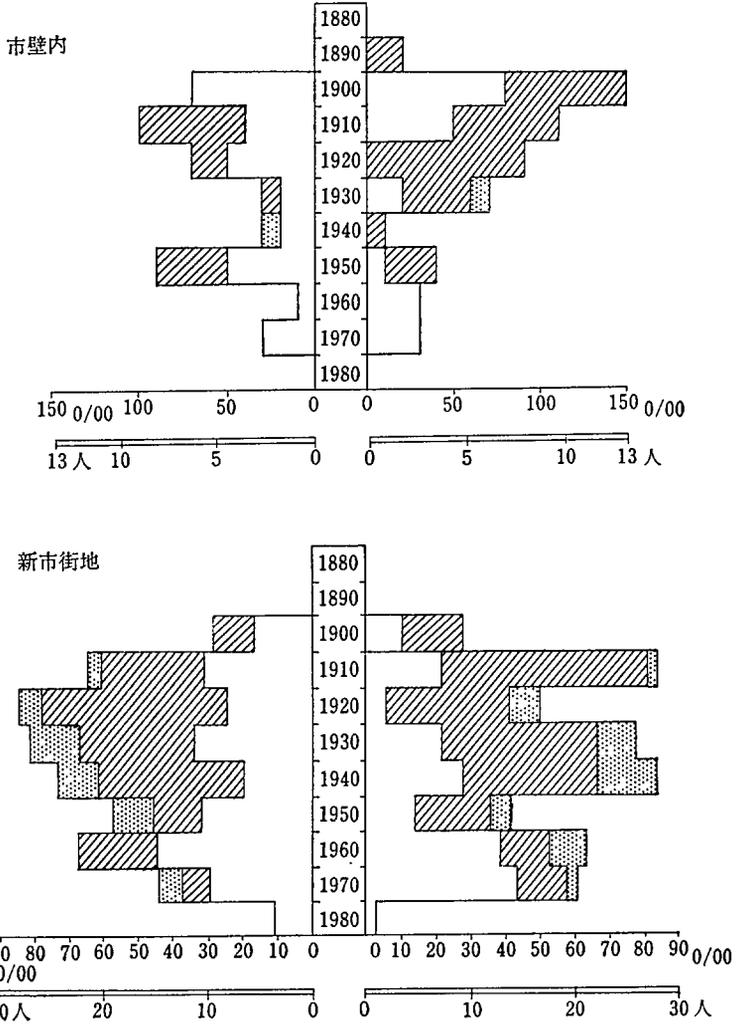
ヴァリアーノの人口の推移（第5表）から、いくつかのことを観察、あるいは推定することができる。現在のヴァ

第7図 カペッツィーネ・ファットリーアの所有地 (1923)

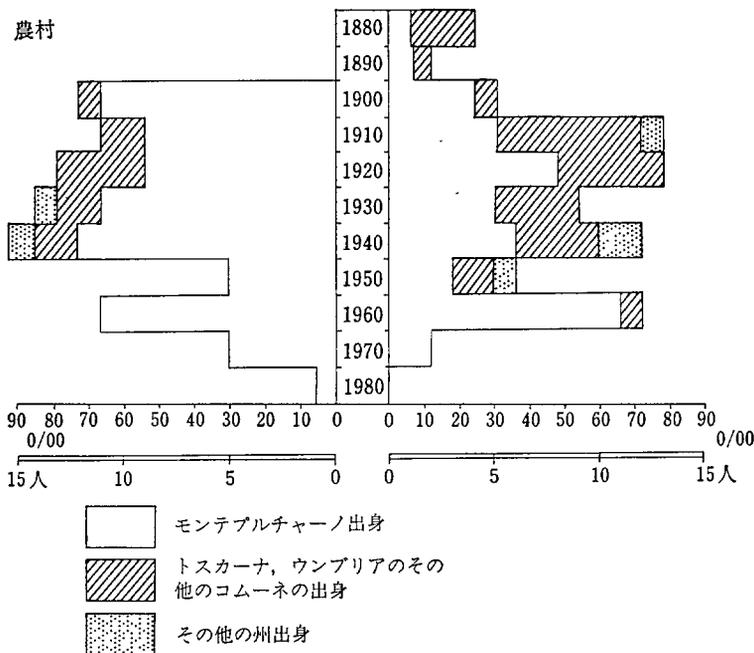


リアーノ全体の人口規模は、ほぼ十九世紀初頭と同じであり、人口が最大であった一九五五年の四五パーセントである。一九五五年から一九六九年の間における人口の急減は、折半小作制の危機に対応するもので、特に農村部における人口減が著しいのもこのためである。集居部と農村の散居部との人口の割合は、現在と十九世紀初頭とは、数字の上ではあまり違ってはいないが、その実体は非常に異なっている。農村部の人口は、一九六九年以降、ほとんど変わっていないが、農業従事者数は、減少を続けており、農村に居住する非農家および兼業農家の数は着実に増大しているのである。それにともなっており、また、住居の位置も、かつての

第8図 ヴェリアーノの人口ピラミッド



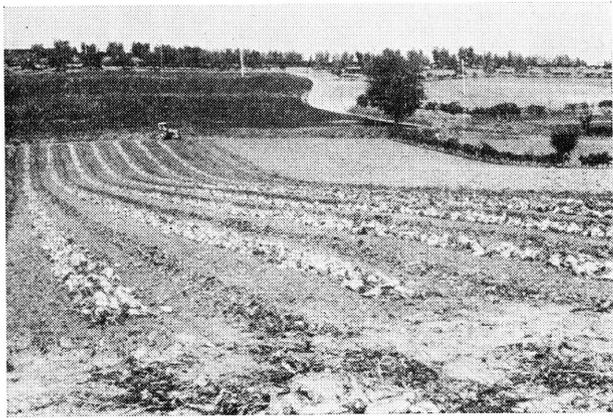
トスカーナ折半小作地帯の最近における変貌



(注) 教区司祭 Mons. Fumi の記録による。

折半小作農の家屋があった場所から、主要道路に近い所に移ってきている。すなわち、多くの、かつての折半小作農の農家 (Colonica) が廃屋化する一方で、おなじ散居形態ではあるが、農家や非農家の新築が進行しているのである。このようにして、農外就業人口の比率が増大するというかたちで、散居部の人口は一九六九年以降停滞しているのに対して、ヴァリアーノの中心部をなす集居部の人口は一九六九年以後急減した。これは壁内の旧中心部の人口が特に減少したためであって、もともと職人、商人などが住み、小さいながらも周辺農村の中心として活気をおびていた旧中心部では、約四分の一の家屋が空家になっているし、第8図に見られるように、人口が老齢化し、平均家族構成員数も、どんどん小さくなってきている。おなじ、集居部でも、

写真2 ヴァリアーノ、ヴァルディ・キアーナのビート畑



この耕地の端には、かつての混合耕作の名残りである葡萄の列が残っている。

壁の外では、商人、ホワイトカラー、ブルーカラーなどの住民が住み、活気を呈していることは、第8図の年齢構成にも反映している。

中心部の人口が、住宅地が壁の外に発展しはじめる今世紀はじめまで停滞的であったのに対して注目されるのは、十九世紀を通じて農村の散居部の人口が一貫して増大していたし、一戸あたり平均約八人に達する大家族が、それにつれてその数を増大させている。このことは、すでに指摘したパッツァリの言う「折半小作制の再編・強化」が進行し、農民の生活水準の上昇を必ずしもともなわなくても、ポデーレの分割が土地利用の集約化をともなったであろうということを推定させる。十九世紀前半については、ヴァリアーノでこのことを実証する資料はないが、後半にかけては、後にふれるカベツツイーネ・ファットトリーアの史料が、このことをはっきりと実証している。

集落ごとの土地利用状況を知る統計資料は第二次大戦前の農業台帳 (Catasto Agrario) に関しても、第二次大戦後の世界農業センサスに対応するセンサスについても、得られない。しかし、カベツツイーネ・ファットトリーアのデータから、収益構成に関しては、一八五〇年代以来一貫して、一位が樹木栽培（葡萄とオリーブ、若干の果樹）、二位が

写真3 カベッツィーネ・ファットリーアの建物遠景



学校法人「ヴェーニ」のファットリーアの管理センターが置かれていた所であり、1964年から1975年では、ヴァルディキアーナ農業協同組合の本部であった。現在はコルトーナの実業家が所有し、農業労働者を用いた大規模経営がなされている。周辺の、かつて混合耕作のおこなわれていた耕地はすっかり葡萄の専用畑になっている。

牧畜（牛および豚）であることがわかり、ヴァリアーノの農業が、かなり肉畜生産に傾斜していたとはいえ、基本的には、集約的混合耕作を主体にしていたことがわかる。これは、ヴァリアーノが、すでに述べたように、ヴィノ・ノールビレ、モンテプルチャーノとキアンティ・ヌオヴォという二つの葡萄酒銘柄生産地帯に属することから当然のことであるともいえよう。

このような混合耕作と結びついて、一九五〇年頃までのヴァリアーノで支配的であった土地制度は折半小作制であった。それを確認する記録はないが、何人かの老人の話から、一九四〇年頃、折半小作農でなく農業を営んでいたのは、自給的生産を目的にした約二〇戸の職人、商人と、約二〇戸の極めて零細な、したがって農業労働者として生計をおぎなっていた農家にすぎなかったようである。これらの折半小作農でない兼業農家および零細自作の耕地は、地籍図の上で確認したかぎりでは、ヴァリアーノ全体の約一二五〇ヘクタールの耕地のうち五〇ヘクタールにみたない面積であった。その他の耕地は、すべて折半小

作農のポデーレになっていたのであるが、その約三分の二の八一五ヘクタールは、通称カベッツィーネ・ファットリア (Fattoria delle Capezzine) が一八五七年以来所有していた。その他大きなものでは、バラッツィ (Palazzi)・ファットリアが一四五ヘクタールを所有し、その他は、モンテプルチャーノやコルトーナの中小地主によって所有されていた。すなわちヴァリアーノの八割近くがファットリアに組織されていたのである。

バラッツィ・ファットリアは、ここから東にかけて、すなわちウンブリア州にかけて全体では約三〇のポデーレからなる四〇〇ヘクタールほどの土地を所有していたようであるが、詳しくは調べていない。⁽⁵⁷⁾カベッツィーネ・ファットリアも隣接するアレツツォ県のコルトーナのコミュニネ領域内にも土地があり、総計一〇一〇ヘクタールの所有地をなしていたのであるが、住民の意識においては、カベッツィーネ・ファットリアと言えばヴァリアーノのファットリアであり、また、ヴァリアーノと言えば、カベッツィーネ・ファットリアの村と考えられていた。

このカベッツィーネ・ファットリアは、一八五七年、シエナ出身でフィレンツェの実業界で幅広く活躍していたアンジェロ・ヴェーニ⁽⁵⁸⁾によって、コルトーナの土地所有者から買い取られた。コルトーナの境界線に近い丘陵上のファットリアの建物は、今世紀はじめに改築されているが、当時から存在していた。一九二五年にコルトーナ領域内において一〇〇ヘクタールほど買ったして一〇一〇ヘクタールになったのであって、当初は、ほとんどがモンテプルチャーノのヴァリアーノに位置する九四〇ヘクタールからなっていた。一八八三年二月、死にさいしてヴェーニは遺言をのこし、郷土の農業振興のため、農学校をカベッツィーネ・ファットリアの土地に設立することを指示した。このようにして、一八八三年五月に設立された法人、「ヴェーニ」農学校 (当初 Istituto "Vegni" と称され、後に Istituto Agrario Vegni となった) が、フィレンツェの屋敷や工場、各地にあった別邸や製粉所とならんで、カベッツィーニ・ファットリアの経営にあたることになったのである。学校の敷地は、色々経緯はあったが、ファットリ

ーアの建物の敷地に隣接するコルトーナのコミュニネ領域内に定められた。このため、この学校法人の理事会には、当初から、モンテプルチャーノのコミュニネからの代表とコルトーナのコミュニネからの代表とが、それぞれ一名ずつ加わることになっていた。この農学校は、一九二〇年頃までに、フィレンツェのガリレオ工場跡地や、その他の各地に散在する財産を処分し、もっぱら、コルトーナとモンテプルチャーノとで、農学校とカベッツイーネ・ファットリーアとの経営に当ることになった。農学校が経営するファットリーアとはいえ、通常のファットリーアと同様に、差配 (fatore) が、ファットリーアの中心をなす建物に住み、ボデーレごとに住んでいる折半小作農の管理に当たっていた。ただ地主が学校法人であるため、毎年提出された事業・会計報告 (Relazione al Bilancio Consuntivo dell' Esercizio) には、学校経営の分とならんで、ファットリーア経営の分も記入されている。一九四四年の時点まで、一般的に言えることは、ファットリーア経営は、法人財産の増殖に大いに寄与し、他方、学校経営は常に大幅な赤字で、学校部門の諸収入の総額にはほぼ匹敵する額の持ち出しを法人は強いられていた。たとえば、ファットリーア経営の純益は、一九二五年六一四、五四三リラ、一九二六年四三四、六二二リラ、一九二七年二二四、六三七リラであったのに対し、学校経営の赤字は、一九二五年が一九四、二六三リラ、一九二六年が二三一、一〇二リラ、一九二七年が一六六、一八九リラであった。まさに、アンジェロ・ヴェーニの遺志の通り、ファットリーア経営がもたらす剰余によって、全国的にもかなりの名声を博するにいたった農学校が経営され、その設備も最新のものを揃え、改築などのための資金をも蓄積することができていたのである。

ファットリーア経営の重要な部分は、折半小作農の管理であり、毎年三月一日に更新される小作契約⁽⁶⁰⁾にはじまり、以後、各小作人ごとに、詳細に、貸方、借方の記帳がおこなわれる。記帳は、差配の側の帳簿と、各小作人が持っている小作手帳 (libretto colonico) の双方になされた。記帳される件数は、小作人によって違うが、多い場合は、ほと

んど毎日、少ない場合でも、平均して一週間に一回はある。同時に差配は、各ボデーごと、作物別収量、家畜数などを詳細に記帳した。地代は、現物で納入されたが、記帳は金額でなされ、精算は農業年の終りになされていた。

このような折半小作人の管理の他に、差配は、一九二〇年頃には四五ヘクタールに達していたファットリーア直接経営地の農作業、ファットリーアが直接飼育している家畜の世話、葡萄酒の製造と保管、地代として納入される生産物の管理、そして出荷のための交渉をしなければならず、これらすべての仕事のために、一九二〇年頃には、ファットリーア内に事務員二名と専属の職人乃至労働者五名が居たし、ファットリーアに所属する折半小作農およびその他の臨時労働者の労働日は、年間約一七〇〇日に達していた。

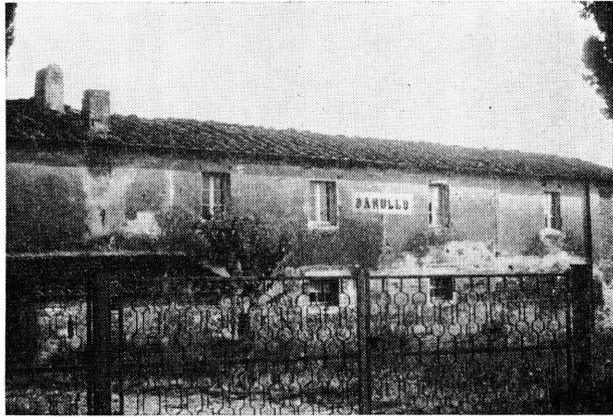
このような帳簿による以外に、第二次大戦前のヴァリアーノの折半小作農の生活が、実際にどのようなものであったかという事は、よくわからない。現在わずかに残っている旧小作人の話によれば、日常生活において、貨幣による購入がかなりあったとのであるが、彼らの記憶はせいぜい一九三〇年代までにしか遡らず、それ以前については、多くの論者が指摘しているように、二十世紀に入っても、折半小作農の生活は、貨幣経済にまきこまれる部分が少ない自給自足的傾向が強かったであろうことは、上述の差配と小作人の関係からも推定される。

第二次世界大戦後のいわゆる「折半小作制の危機」は、ここカベツイーネ・ファットリーアの場合、なによりも、学校法人「農学校ヴェーニ」の経営状態の悪化としてあらわれた。法人としての全般的収支において、一九四五年に赤字を出し、一九四六年には何とか黒字にしたものの、以後恒常的に赤字経営であり、学校経営における莫大な赤字は、ファットリーア部門で何とか一九五一年まで続いた黒字では到底補填できない額に達した。これは一九四六年以降、ファットリーア部門における収益率が一貫して低下したことよってであるが、この理由は、このファットリーアにおいて見るかぎり、イタリア全体、なかならず中部イタリアにおける地主・折半小作農間における力関係の変化に

よる配分率の土地所有者側にとつての悪化によるものよりも、各ポデーレにおける折半小作農の交代が甚だしく、一九四九年以降は、農業年の途中においても折半農が離村してしまふ事例が見られるようになり、このようにして、折半農の定着性が低下したことが、農業生産力の減少を結果したことに大きくよつてゐる。一九五〇年代を通じて、ポデーレの一〇パーセントから二〇パーセントが地代収入がゼロになつてしまつており、このことは第二次世界大戦後イタリア全体で顕在化した労働力の流動化の中で、折半小作農の所得水準が、相対的に低いものになり、またかなりの部分の折半農が自作農に上昇したエミリア・ロマーニャとちがつて、トスカーナでは、そのような上昇をとげるだけの蓄積も、折半小作農のもとになされていなかつたといふことが、⁽⁶⁴⁾ここでもはつきりとあらわれたことを物語つてゐる。ここにおいて、ヴェーニの遺志通り、ファットリア経営に支えられて、模範的な学校経営がなされていた期間というのは、換言すれば、通常のファットリア経営において、土地所有者が大きな利益をあげることのできた時期といふことであり、この学校法人の経営状態が悪化し、一九五一年以降は、ファットリア部門さえが、年によつては赤字を出すにいたつたことは、ヴァル・ディ・キアーナにおけるファットリア経営が一般的に、土地所有者にとつて不利なものになつたことを物語つてゐる。

学校法人の経営が、このようにして、累積的な負債をかかえ続け、その原因が何よりもファットリア部門における経営状態の悪化にあることが明らかなかぎり、学校教育の当事者が、ファットリア付き農学校という異常な形態をやめ、通常の私立学校として国家からの補助を受けるか、あるいは国立に移管することを考えるようになったのは当然のことであつた。一九五七年に、学校法人の負債は三億リラ（当時の交換率で一億九千万円）に達し、政府も伝統ある農学校を救済するために、一九六〇年の政令一四二号で、一九五八年十月一日にさかのぼつてヴェーニ農業高校（Istituto Tecnico Agrario “Vegni”）を国立にし、カベッツイーネ・ファットリアの運営はヴェーニ財団（Fon-

写真4 旧カベッツィーネ・ファットリニアに
属する折半小作農の農家



この農家の屋号はバルッロで、カベッツィーネ・ファットリニアに属する家屋は、すべてこの形式で屋号がかかげられていた。この家屋は1979年以來居住が放棄されている。

dazione ("Vegni")にゆだねられることになった。しかし、この段階ではまだ、農業高校とヴェーニ財団とは、密接な関係を持っており、学校の建物とキャンパス（六〇ヘクタール）は、ヴェーニ財団が無償で提供するかたちをとり、学校長は、ヴェーニ財団の事務局長を兼ねることになった。

一九六〇年には、トスカナ全体について見ても、殆どどのファットリニアが所有地を大幅に手離していた時期であったが⁽⁶⁾、ここにおいては、ヴェーニ財団が負債を累積させながら、カベッツィーネ・ファットリニアの経営を続けることになったのである。しかし、このような財団の提供する老朽化した校舎・寄宿舎では十分な教育活動を行なうことができず、また、債務に追いまわされる財団の事務局長の職から逃れたいためもあって、校長をはじめとする学校側は、財団からの完全分離のために

奔走して、一九六四年、国家が建物およびキャンパス用土地約一〇〇ヘクタールを買い上げ、財団は、その売却金を債務返済の一部にあてて解散し、残りのファットリニアの土地、家屋は、すべてモンテプルチャーノとコルトーナの裁判所により競売に付された。コルトーナにあった土地は一〇〇ヘクタールが学校用地になり、競売に付されたのは、

一六〇ヘクタールに過ぎなかったが、ヴァリアーノでは、そこにあったファットリアの所有地八一五ヘクタール全体が、ファットリアの建物および折半小作農の建物とともに競売に付されたのである。このようにして、ヴァリアーノを代表するカベッツイーネ・ファットリアは、その長い歴史を閉じて消滅したのであるが、このような経緯のために、ファットリアがヴェーニの所有に帰した一八五七年以降の帳簿などの記録の大部分は——一部はコルトーナのコムーネの古文書館に入っている——未整理のまま埃をかぶっているが、散逸を免れて、ヴェーニ農業高校に保管されていて、筆者が利用することができたのである。

一九六四年、競売の時点で、カベッツイーネ・ファットリアのヴァリアーノ部分にあったポデーレの数は帳簿上は五二であるが、そこに居た折半小作農は三八戸にすぎない。このうち、競売において、個人で小作地を買い戻したのは五戸にすぎない。しかし、一一戸の旧小作農（二戸はすぐ脱落して九戸になった）は、社会党のイニシアティブのもとに、小土地所有農民公庫（Cassa della Piccola Proprietà Contadina）から有利な融資を受けて、「ヴァルディキアーナ農業協同組合」（Cooperativa Agricola “Valdichiana”）を結成して、旧ファットリアの建物と直接経営地をふくむ三〇八ヘクタールを購入して、共同経営に乗り出した。このヴァル・ディ・キアーナにおいてはあまり例のない生産協同組合の試みは、旧折半小作農が、折半小作制の崩壊後も、自らが耕作していた耕地にとどまり、かつ、ECの共通農業政策のもとでも大規模自立経営として生き残る可能性を秘めていたと考えられるが、その構成員は、ヴァリアーノで農業を続ける途を選ばなかった。すなわち、法律で規定されている売却禁止期間一〇年を経過した後、一九七五年に、協同組合の定款を改訂して、三〇八ヘクタール全部を売却して、九人の構成員は全員ヴァリアーノを去り、それぞれ、商業、サービス業などの事業をはじめた。⁽⁶⁶⁾なお、この土地を購入した八人は、いずれもヴァリアーノ外の人であり、二人のサルデーニヤ人もふくまれる。牧羊経営を営むサルデーニヤ人以外は、機械力を大幅に導入

第6表 カベッツィーネ・ファットリーアのヴァリアーノ部分における
折半小作農民の定着状況

年	ポデーレ数	折半小作農家数	該当年から残っている農家数				
			1859	1881	1925	1952	1958
1859	21	21					
1881	37	37	16(15)				
1925	45	45	5(4)	12(6)			
1952	44	38	3(1)	9(6)	20(12)		
1958	52	36	3(1)	4(2)	18(11)	30(26)	
1970	—	—	2(0)	3(1)	8(3)	12(10)	14(12)
1980	—	—	1(0)	1(0)	7(2)	8(2)	8(2)

資料が許す限り逐年的に追っていった、同じ姓で名前が変わった場合には、息子があとをとったと見做して同じ農家が存続したと判断したが、戸籍簿にあたったわけではないから、親族が、当該農民の死後同じポデーレに入ってきたという可能性もある。ファットリーアの帳簿では、通常農民名を書かず、屋号(第7図の地図上に記入されている Casa Nuova, Palazzo Vecchio などの名前)だけで記帳されているので、各ポデーレを耕作している農民の氏名を知りえない年がかなりある。

()内の数は、同じポデーレに残っている農家数で、折半小作農が、カベッツィーネ・ファットリーア内でポデーレを移る場合がいくつかあった。

1970年と1980年の数は、ヴァリアーノに残っている農家数である。1970年と1980年については、教区のジュセッペ・フーミ神父 (mons. Giuseppe Fumi) から得たインプォーメーションによった。

した資本主義的農業経営を営んでいる。

このようにして、一九八〇年の時点で、一四四年のカベッツィーネ・ファットリーアの三八戸の旧折半小作農のうち、戸主あるいはその後継者がヴァリアーノに住んでいるのは九戸にすぎず、このうちかつてのポデーレを所有しているのは二戸だけであり、このうち一戸は、兼業農家で、経営規模を拡大して安定した農業経営をおこなっているのは一戸だけである。⁽⁶⁷⁾

古典的折半小作制 (mezzadria classica) についてしばしば言われるような、先祖代々同じポデーレに住みついている農民というイメージからすれば、カベッツィーネ・ファットリーアの旧折半小作農の残存率のこの低さは注目されるべきことかもしれない。その最大の理由は、すでに指摘したように折半小作農のもとに、土地を買い戻し、EC体制下での農業経営を展開していくための蓄積がなかったことにあるのであ

るが、そもそもファットリーア体制のもとで、折半小作農が、古典的折半小作制のもとにおけるように、ポデーレとの強い結びつきを持っていただろうかということがまず検討されなければならない。カベッツィーネ・ファットリーアについては、これを追跡することができるので、おおよその姿を知るためにまとめたのが第6表である。一九世紀後半を通じてポデーレの数が増大したのは、すでに指摘したように、ポデーレの分割と土地利用の集約化による折半小作制の再編強化というトスカーナで一般的に言える過程に対応するものであって、ファットリーアの所有地面積は、ヴァリアーノ部分に限る限り変っていない(第7図参照)。第6表を見れば、たしかに、ファットリーアの解体後、そして特にヴァルディキアーナ農業協同組合の解散後、旧折半小作農の残存率は非常に低下したことがわかる。しかし、むしろ注目すべきは、一般的に言えば伝統的な、自給自足的な経済がかなり卓越する農村としては、むしろ例外的なくらいの高い流動性をもって、すくなくとも、十九世紀中葉以降農村人口が交代し続けてきたということではなからうか。そして、これは、ここカベッツィーネ・ファットリーアだけのことではなく、フォンネスなどによって類似の調査がなされたヴァル・ディ・ペーザのロッジャ・ファットリーアとヴァル・ディ・グレーヴェのウッザーノ・ファットリーアの場合⁽⁶⁸⁾にも、これと同じ程度の農村人口の高い流動性が示されているから、すくなくとも十九世紀におけるファットリーア体制のもとにおける折半小作制再編成後のトスカーナ農村においては、古典的折半農制度のもとにおけるのとまったく違った、農村人口の高い流動性が一般的であったと言うことができよう。高い流動性といっても、しかしながら、さきにかかげた第8図から読みとれるように、農民が移動する範囲は、第二次世界大戦時までは、短距離、おそらくは同一コムーネ内部に限られていて、州を越えた移動、サルデーニャや南部半島部から牧人や農民が移住して来て、トスカーナ農民がはるか遠くの北部工業地帯などに大量に出ていくようになったのは、一九五〇年以降のことである。カベッツィーネ・ファットリーアの農民の高い流動性にかかわらず、第8図が示すよう

第7表 ヴァリアーノにおける農業経営体の分化状況(1970年)

	自作農	賃労働者を雇用する資本主義的経営	折半小農	計
5 ha 未満	36	1	2	39
5 ha 以上 10 ha 未満	13	0	4	17
10 ha 以上 20 ha 未満	10	0	5	15
20 ha 以上 50 ha 未満	8	1	0	9
50 ha 以上	0	2*	0	2
計	67	4	11	82
50 頭以上の豚を飼育する経営		9		
20 頭以上の牛を飼育する経営		3		
100 頭以上の羊を飼育する経営		2		

* このうち一つは、1975年に解散したヴァルディキアーノ農業協同組合であって、その土地は現在は五つの資本主義的経営体になっている。

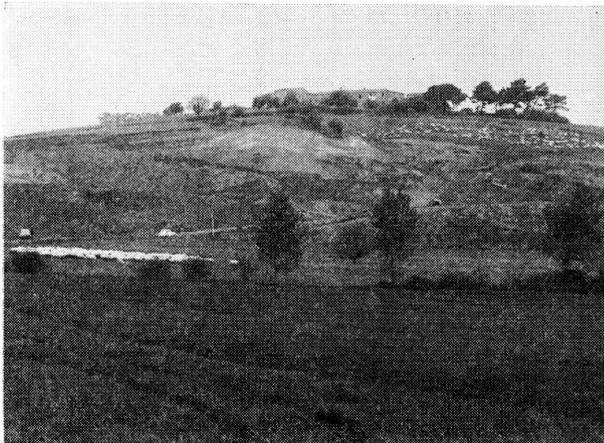
(資料) モンテプルチャーノ役場の提供による 2* Censimento Generale di Agricoltura によるデータ。

に、ヴァリアーノ農村部の男子人口においては、モンテプルチャーノのムーネ内に生まれた者が圧倒的に多い。集居部の非農業人口の方が、ずっと遠距離にまで及ぶ流動性を示しているのである。

すでにモンテプルチャーノ全体について概観をしたが、農業経営の内容を見るために、ヴァリアーノについての一九七〇年農業センサスからの経営階層の分化状況を示すデータを第7表にあげる。モンテプルチャーノ全体について指摘したように、五ヘクタール以下の経営規模では、自立專業農家と呼ぶのに程遠く、兼業農家または農業労働者のカテゴリーに入れられるべきものである。一〇ヘクタール以上を一応安定した農業経営と見做すと、その数は全経営体の三分の一以下である。カペッツィーネ・ファットリアの第二次大戦前の経営に比して家畜数、特に牛の数は非常に減少しているが、豚五〇頭、牛二〇頭、羊一〇〇頭という線で一応切ると一四の牧畜に傾斜した経営体があり、これらはいずれも、一〇ヘクタール以上の農地を保有している。

農家数、特に、本来的な專業農家と考えられるべきものの数はこの様に非常に減少したし、一九八一年の農業センサスの結果が

写真5 旧カベッツィーネ・ファットリーアに属する
折半小作農家 コッレⅢおよびコッレⅣ



これらのボデーレは、ヴァルディキアーナ農業協同組合の解散後、サルデーニヤ人の所有に帰し、牧羊経営がなされている。ほとんどの部分が永久放牧地か牧草栽培地になっているし、近くの鉄道新幹線工事のために土を売ってもある。

出れば、この傾向がさらに進行していることが確認される筈であるが、旧折半小作農の家屋でも完全に放棄されているもの数は少なく、ヴァリアーノ全体で五戸程度である。非農業従事家族の住宅になっている場合もあれば、倉庫・農業機械の置き場所として利用されている場合もある。さらに、約二五戸の旧折半小作農の家屋が、実質的な農業労働者（五ヘクタール以下の農業経営体）あるいは純粋の農業労働者（農地をまったく保有しない）によって住まわれている。後者の場合、彼らは、自らが労働に従事する耕地の中に住んでいるのであるから、形態的には、古くからの折半小作農と変らないが、彼らは、ヴァリアーノ外、ミラノ、ローマに住む者をも含む不在地主との賃金契約にもとづいて農作業に従事するという点で折半小作農と異なっているが、新しいかたちで存在するようになった最下層の農業専従者であることはたしかである。

一九五〇年頃に比して、現在の土地利用状況は、経営規模、経営形態の相違によって多様化が著しい。機械力を導入できるような葡萄の専用地、飼料・工芸作物用の耕地は大規模経営体の農地に限られるし、零細な経営体は、自給的農業の性格が強く、まだ混合耕作形態を残して、多種類の作物を栽培している。牧畜を主とする專業

農家が飼料作物に耕地の大きな部分をさくのは当然としても、工芸作物のうち、ビートにするか、煙草にするか、ひまわりにするかということになると、企業家的精神にもとづく判断が要求され、すくなくとも安定專業経営体のレヴェルでは、それぞれが、かなり異なった土地利用選択することになる。さらに、ヴァルディキアーナ農業協同組合から、コッレI、II、III、IV、V、の屋号をもつポデーレ⁽⁷⁰⁾を買い取った二戸のサルデーニヤ家族は、農地の大部分を永久放牧地にし、さらに丘陵を切り崩して土を新幹線工事のために売り払って、ヴァリアーノの古くからの住民の聲をかつている。土地利用の多様化に関しては、土地条件の影響も、以前よりも大きな影響を持つようになり、谷底平野部においては、零細経営による残存した混合耕作をのぞいて、葡萄栽培が姿を消しつつあり、葡萄の専用耕地は、そのための土地条件に恵まれた丘陵地帯に集中する傾向がある。

(53) ヴァリアーノの歴史については、Calabresi, I. (1982). Shimizu, K. (1982) を参照。

(54) 土地台帳および地籍図において地番が一から七六までであるが、このうち、六つは現在もそうであるし、過去においても菜園として利用され家屋はなかったと思われる。

(55) 住民台帳 (stato dell'anima) では、ヴァリアーノ集居部に関して一九四三年から「壁の中」(Dentro le mura) と「壁の外」(Fuori delle mura) に分けているが、一九一六年より、おそらくは、県道沿いの壁の外の部分に、若干の商人、職人が住みはじめたことが、人口動態から推測される。

(56) 一九七〇年センサスでは、一一一〇ヘクタールであったが、現在、宅地、永久放牧地になっている面積を考慮に入れると、一九四〇年頃は、約一二五〇ヘクタールの耕地があったと推定される。

(57) 調査の期間が制約されていたため、ウンブリア側の土地台帳を検討することができなかった。また、このようにして、二つの州にまたがるファットリア経営が例外的なものとは必ずしも言えないようで、キウジにも類似の事例がいくつかあったようである。また、パラッツィ・ファットリアの場合、一九五〇年代のはじめからポデーレが何回かに分けて売却され、ファットリアの建物自体第二次大戦後三回も所有者を変えていて、ファットリア経営の記録は散逸したのか処分されたのか

所在不明である。

- (58) Angelo Vegni は工学者で、圧搾ポンプなど、いくつかの独自の製品を開発して成功し、フィレンツェのガリレオ工場など、いくつかの工場を経営していた。
- (59) 全部が保存されているわけではないが、一九二〇年代中葉より、印刷されたパンフレットの形をとっている。
- (60) シェナ県では三月一日を農業年の開始にするのが一般的であった (Pestellini, J. (1980) による)。コルトーナ県では、一月三十一日に契約を更新していた事例をいくつか確認することができた。三月一日に契約が更新される場合には、前年の十一月三十日までに地主が通知することによって、折半小作契約は一方的に破棄された。
- (61) 場合によっては、旧小作人の場合もあるが、ファットリーアの折半小作農以外の臨時的労働力の性格はよくわからない。おそらくは、さきに指摘した零細自作農などによるものであるかと考えられる。
- (62) 農学校には、実習あるいは試験用の農地がコルトーナにかなりあったし、また同様の目的のために家畜もかなり飼育されていたが、経営上は、これらは、葡萄酒製造をのぞいて学校部門に属するものと考えられていた。
- (63) たとえば Pazzagli, C. (1976).
- (64) Di Pietro, Gian Franco (1976) 124-6.
- (65) Fonnesu, I., Poggi, C. e Rombai Leonardo (1979).
- (66) 流出した人たちが、どこに行つて何をしているかということ調べるのは、工業化社会の農村では一般に困難なことであるが、農村人口の流動性の高い中部イタリアの農村では、特にむずかしくて、住民は、そのようなことを知らないし、あまり関心ももっていない。九人のうち、行先を聞き出すことのできたのは五人だけである。
- (67) この一戸は、一八五〇年代にすでにカベツティーネ・ファットリーアの折半小作農だった農民の子孫である。
- (68) Fonnesu, I., Paggi, C. e Rombai, L. (1979). この研究では Fattoria della Loggia につづいては、一九一一年以降の、Fattoria di Uzzano につづいては、一九三六年以降の折半小作農の交代が逐年的に調べられている。
- (69) 畝の間の土おこし、消毒は完全に機械化されているし、剪定のための大型機械も一九八一年に二台ヴァリアーノに導入さ

れた。近い将来收穫も機械化されると思われる。このような大型機械の導入のためには葡萄の列の間の間隔を大きくとらなければならぬ。

(70) Colle I から Colle V までのポデレレは一八六二年までは一つのポデレレであったが、以後何回かにわたって分割され、カベツツイノ・ファットリニアの土地の競売の結果、ヴァルディキアーナ農業協同組合の土地となり、後者の解散の後、一八六〇年代の状態に戻って二戸の血縁関係にあるサルデーニヤ人の土地になり、彼らにより牧羊経営が営まれている(写真5参照)。

五 結論にかえて

本稿においては、意図的に、そして図式的なまでに一般から特殊へ、そして、大きい地域単位から小さな地域単位へとこの検討の方法がとられた。まったく逆の論理による展開もありえたであろうし、特殊から一般へ、そしてより小さな地域単位からより大きな地域単位における普遍化へと論理を展開するのが、この種の研究が創造的価値をもつためには、とられるべき方法であろう。しかし、そのためには、いくつかの小地域についての個別事例の研究をつみあげるか、他の比較可能な事例研究をいくつか検討しなければならぬ。しかし、筆者の今回の調査は、時間的に限られたものであったので多くの事例研究を、ヴァル・ディ・キアーナなりトスカーナなりの範囲ですることは不可能であったし、他方十九世紀以来の農村景観、土地制度の展開との関連で、あるいはそのような文脈の中で、第二次世界大戦後、急速に進行した折半小作制の崩壊、農業景観の変化を、本稿で試みたようなムラ単位で検討した事例研究は、トスカーナ全体についてもその数が少ないし、ヴァル・ディ・キアーナについては皆無である。十九世紀以降の折半小作制についての議論は、本稿においてもいくつかふれたようになされているし、第二次大戦後の折半小作制の

危機についても、かなり大きな地域単位で、また危機一般を取りあげた文献はいくつかある。このようにして、一般化のかなり高い段階の文献が、イタリア人をはじめとする多くの研究者によって発表されている所で、一つの事例研究をするときに、筆者が実際にとる作業の手続きは、本稿の順序、すなわち、自分の従来の研究の発展として、発表されている文献を読み、トスカーナあるいはヴァル・ディ・キアーナというような地域単位で一般化された議論から自分の問題意識を養ない、その後でコムイーネやムラでの調査をするという順序である。取り上げた地域が、ヴァル・ディ・キアーナ、そしてモンテプルチャーノというコムイーネ、そしてヴァリアーノという地区であるというように、非常に限られた事例であるが、研究成果をまとめる段階では、すくなくとも自分が調べた事例では、そのようなことがない場合に、たとえ、それが、通常一般的に言われていても一般的なこととしては認めない、すくなくとも留保条件をつけるというチェックは可能であった。これはフィールドバックというよりも消去法にすぎないが、第一節から第四節まで下降していく記述は、このようなチェックだけは経たものなのである。

モンテプルチャーノに関して、ヴァリアーノに関して、さらにはカベッツイーネ・ファットトリーアに関して提起された問題は、それからヴァル・ディ・キアーナについての、あるいはトスカーナについての一般モデルを作っても、現在の段階では検証不可能であるので、あくまで、問題提起にとどめておくべきであろう。本稿でとりあげたそのような問題点として、重要と考えられるものを、以下列挙することにする。

(一) 十九世紀トスカーナの折半小作農の性格に関して言えば、筆者にとつては、土地利用の集約化・ポデーレの分割によるファットトリーア経営の再編強化というテーゼが、より説得的である。カベッツイーネ・ファットトリーアの場合、農学校がファットトリーアに寄生していたのであるが、農学校が私的不在地主に代ったのが一般のファットトリーアであろう。この段階でトスカーナ農業における資本主義の発展、折半小作農のプロレタリア化ということを言うのは、

用語の問題としても、筆者は賛成できない。

(二) 折半小作農制—混合耕作の結びついた地帯における農村人口の流動性がかなり高かったことは、ポデーレと折半小作農との結びつきが決して強くなく、小作契約が地主の側から容易に破棄され得るような小作慣行があり、また、折半小作農の一年間のファットリーア当局に対するバランスがマイナスになって、折半小作農がポデーレから出て行かなければならなかった事例が、十九世紀後半および今世紀前半を通じていくつか確認できることから、十分にあり得たことである。一九五〇年以降におけるトスカーナ農村人口が、全体として減少しつつも、かなり交替していることも、このようにして、トスカーナ農村が歴史的に持っていた人口の流動性の中で理解すべきであろう。しかし、一九五〇年以降の人口の流動性が、その移動距離の大きさ、トスカーナ農民の流出先がほとんど非農業部門であること、トスカーナ・ウンブリア以外の相対的に後進的な州から人口が流入してきたというような新しい性格をおびたという面も無視することはできない。

(三) 農村における階級関係を分析するのに、どこの国の農業センサスも多くの限界を持っているが、イタリアの場合もその例外ではない。戸主が兼業する農家数は調べられているが、その程度はまったくわからない。ヴァル・ディ・キアナでは、経営規模が五ヘクタール以下の場合、自己の保有農地以外からの所得のある場合が多く、これらは、日本で言う兼業農家か農業労働者と見做されるべきで、それは、センサス上の農業経営体数の三分の一以上に達する。しかも、これら零細農業経営体の所得水準は農外所得を加えても確実に低いようである。しかし、一九七〇年のデータで戸主が自己の保有地以外で主として働く経営体の比率は、トスカーナは全農業経営体数の二九・七パーセントで、イタリア全体の三二・三パーセントより低く、この兼業戸主のうち、他の農業経営体で働く者の比率は、トスカーナで一五・二パーセントで全国の二九・五パーセントよりはるかに低い。この数値と比較するとヴァリアーノは、イタ

リアの中では、まだ農民のプロレタリア化の進行の度合が低く、家族経営の中間層に位置する自営農がかなり残っている地帯であると位置づけられよう。農村部における老人農業人口の比率も、イタリア全体、あるいはトスカーナの水準に比しても低い。⁷²⁾

(四) おそらくはその起源、そして、発展と再編成の過程を通じて、折半小作制と密接に結びついてきた混合耕作は、たしかにトスカーナ丘陵・平地型農村景観をかたちづくる重要な要素であった。そして、一九五〇年以降の三〇年の間に、折半小作制は、完全に崩壊し、混合耕作も大幅に衰退した。巨視的展望の上に立てば、この二つのことは、第二次世界大戦後のイタリア農業の変貌という一つの過程の中に位置づけられることに違いないが、この場合、生産関係の変化と土地利用の変化あるいは農業生産力の発展との間に直接的因果関係はない。折半小作制度が崩壊したのは、政治的、法制的条件の変化ということもあるが、イタリア経済の高度成長の中でトスカーナ折半農の所得水準が相対的に低いものとなり、労働力の減少、質の低下によって、ファットリーア経営が悪化したことに、最大の要因がある。一九六四年の法律は最後のとどめをさしたにすぎない。これに対して、混合耕作が衰退したのは、EC体制下のイタリア農業の再編成の中で、混合耕作の生産性が相対的にみれば、非常に低下したことによるのであって、それは、とくに一九六〇年代の後半、EC共通農業政策の本格化以降顕著になったものである。分益小作制の下においてであれ、混合耕作は機械化・省力化を余儀なくさせた新しい条件の下で存続し続けることはできなかつたのである。

(五) トスカーナの折半小作農のもとでは、農業生産力の展開を可能にし、また彼ら自身の自作農あるいは資本主義的農業経営者への上昇を可能にするような蓄積がまったくなされていなかつたということは、エミリア・ロマーニャとの対比において注目すべきことであろう。おなじ混合耕作といいながら、牧畜の比重、野菜・工芸作物の比重がエミリア・ロマーニャではトスカーナよりずっと高かつたこと、ファットリーア体制の再編、強化というトスカーナで十

九世紀に生じた過程がエシリア・ローマーニヤでは見られず、ポデーレがカシーナに再編された場合が多かったこと、基本的に、北西ヨーロッパ的農業革命を技術的に可能にしたエシリア・ローマーニヤの自然条件、などがこの相違の理由として考えられるが、これは今後、実証のおよび理論的にさらに検討されるべき問題である。

(71) 収入によってでなく労働日によって規定している。

(72) 自作農だけについて、一四歳から四九歳までの戸主の割合は、一九七六年、全国で四〇・五パーセント、トスカーナで三八・七パーセントであったが、モンテプルチャーノでは、四六・六パーセントに達する。(Barbieri, C. (1979) による。) ヴァリアーノで一九七六年の値は、筆者の推計によると約四八パーセントである。

文 献

- AA. VV.: *Il Chianti Classico*, Ed. Consorzio Vino Chianti, Firenze, 1974.
- AA. VV.: *Storia dell'agricoltura italiana*, Etas, Milano, 1976.
- ACCADEMIA DEI GEORGOFILI: *La mezzadria negli scritti dei georgofili (1873-1929)*, Edizione Agricola Bologna, 1936.
- : *La mezzadria nello stato fascista corporativo 1929. La mezzadria negli scritti dei georgofili*, pp. 248-270.
- ALLEANZA NAZIONALE DEI CONTADINI: *I coltivatori diretti e l'agricoltura toscana*, 1. *Documento preparatorio della 1ª Conferenza Regionale dei Coltivatori Toscani*, 1965.
- AMMINISTRAZIONE PROVINCIALE DI SIENA: *I problemi attuali dell'agricoltura senese*, Convegno Provinciale, Siena, 1958.
- ASSESSORATO DELL'AGRICOLTURA DELLA PROVINCIA DI SIENA, *Il punto sull'agricoltura. Documentazione sui mutamenti avvenuti nell'agricoltura senese nel decennio 1961-1971*.
- BANDETTINI, Pierfrancesco: *L'evoluzione demografica della Toscana dal 1810 al 1839*, Archivio Economico dell'

- Unificazione Italiana, Serie II, Volume III, Industria Libreria Tipografica Editrice, Torino, 1960.
: *La popolazione della Toscana dal 1810 al 1959*, Camera di Commercio, Industria e Agricoltura, Firenze, 1961.
- BARBERIS, Corrado: *Gli operai contadini*, Il Mulino, 1970.
- BARBIERI, Corrado: *Famiglie senza giovani e agricoltura a mezzo tempo in Italia*, Vol. I e Vol II Tomo III, Franco Angeli, 1979.
- BARBIERI, G.: *Memoria illustrativa della carta della utilizzazione del suolo della Toscana*, Roma, 1966.
- BARELLINI, Mario: Relazione introduttiva II Conferenza Regionale dell'Agricoltura - Comprensorio n. 17, Siena, 1977.
- BIAGIOLI, G.: *L'agricoltura e la popolazione in Toscana all'inizio dell'Ottocento*, Pisa, 1976.
- BLOCH, M.: *Les caractères originaux de l'histoire rurale française*, Nouvelle édition, Tome premier, Armand Colin, 1952.
- BORTOLOTTI, Lando: *La maremma settentrionale 1738-1970, Storia di un territorio*, Franco Angeli, Milano, 1976.
- BOTTAI, Marco, COSTA, Marco e FORMENTINI, Ubaldo: Tipologia del movimento demografico e delle caratteristiche socio-economiche in Toscana, in: VALUSSI, Giorgio (a cura di): *Italiani in movimento*, Pordenone, 1978, pp. 277-281.
- CALABRESI, Ilio: *Il Chiaro o Lago di Montepulciano*, Appunti storici con documenti inediti e riproduzione di carte antiche, Acquaviva, 1977.
: Valiano in Valdichiana, *Population Mobility in the Mediterranean World, Studies in the Historical and Contemporary Aspects*, Hitotsubashi University, 1982, pp. 73-87.
- CAMERA DI COMMERCIO, INDUSTRIA, ARTIGIANATO E AGRICOLTURA DI SIENA: *Alcuni aspetti economici e sociali dei territori montani e di quelli già riconosciuti località economicamente depresse*, Siena, 1976.
- CAMERA DI COMMERCIO INDUSTRIA E AGRICOLTURA DI SIENA, Lineamenti Economici della Provincia di

- Siena, in: *Lineamenti economici e prospettive di sviluppo delle provincie italiane*, Giuffrè, Milano, 1964,
- CANESTRELLI, G.: Le regioni a spartiacqua incerto o indeterminato dei bacini dell' Arno e del Serchio, *Memorie Geografiche* (Suppl. alla Rivista Geografica Italiana) n. 9, 1909.
- CIUFFOLETTI, Zeffiro: *Cultura e lavoro contadino nel territorio certaldese*, Firenze, 1979.
- CGIL, CISL, UIL: *Proposte per la Toscana, Analisi, strategia e lotta del movimento sindacale (settembre 1975-gennaio 1977)*, Roma, Sensi, 1977.
- COMUNE DI MONTEPULCIANO: *L'acquedotto di Montepulciano*, Relazione, Siena, 1894.
- CORTESI, Gisella e FORMENTINI, Ubaldo: *La ruralità nei comuni toscani, Contributi a Congressi e Convegni Internazionali (1975-1976)*, Pubbl. n. 23 dell'Istituto di Geografia dell'Università di Pisa, Libreria Goliardica, Pisa, 1976.
- DEL CORTO, Giovan Battista, *Storia della Val di Chiana*, C. Linotti, Arezzo, 1898 (Ristampa anastatica, Forni, 1978).
- DESPLANQUES, Henri: *Campagnes ombriennes, Contribution à l'études des paysages ruraux en Italie centrale*, Paris, 1969.
- : La culture mixte italienne, Essai d'interprétation, *Bulletin de l'Association des Geographes Français*, Oct. 1958, 150-160.
- : Les cultivateurs directs en Italie, *Actes du Colloque de Géographie Agraire, Madrid 23-27 Mars 1971*, Aix-en-Provence, 1972, 123-128.
- : Types de parcellaires dans les bassins intérieurs de l'Apennin, *I paesaggi rurali europei, Atti del Convegno Internazionale indetto a Perugia dal 7 al 12 maggio 1973*, Perugia, 1975, 149-154.
- : Il paesaggio rurale della coltura promiscua in Italia, *Rivista Geografica Italiana*, 1958, 29-64.

- DI COMITE, L: Alcuni aspetti della recente dinamica migratoria delle regioni d'Italia, *Rassegna Economica Italiana*, 1978, 42, N. 4, 883-903.
- DI PIETRO, Gian Franco: Il paesaggio agrario contemporaneo della Toscana, *Città e Regione*, Anno II, N. 1, 1976, Sansoni, Firenze, 54-63.
- FAROLFI, Bernardino: *Strumenti e pratiche agrarie in Toscana dall'età napoleonica all'unità*, Istituto di Storia Economica e Sociale dell'Università di Bologna, 8, Milano, 1979.
- FELICI, Sante: *Sapienza popolare in val di Chiana, parole e cose che scompaiono*, Parte prima, Arezzo, 1977.
- FLOWER, R.: *Chianti, The Land, the People and the Wine*, Croom Helm, London, 1978, p. 421.
- FONDATION NATIONALE DES SCIENCES POLITIQUES: *Tradition et changement en Toscane* (Preface de Jean Meyriat,) Armand Colin, 1970, p. 421, (Cahiers de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, 176).
- FONNESU, Jolanda, POGGI, Cristina e ROMBAI, Leonardo: *Fattorie e mezzadria in Toscana. Evoluzione recente di alcune aziende agricole delle campagne fiorentine*, Quaderno 7, Atti dell'Istituto di Geografia, Università di Firenze, 1979.
- FURATI, F.: Aspetti della migrazione pastorale sarda in Provincia di Siena, *Note Economiche* n. 3, Monte dei Paschi de Siena, 1972, 116-130.
- GAMBI, Lucio: In margine al primo convegno internazionale di storia e geografia rurali, *Rivista Geografica Italiana*, 65, 1958, 52-61.
- : *Questioni di geografia*, Edizioni Scientifiche Italiane, Napoli, 1964.
- GIACINTI, Roberto: L'economia di un podere chiantigiano dal primo ottocento all'unità d'Italia (1816-1864), *Rivista di Storia dell'Agricoltura*, Anno XIV, N. 1, 1974, 71-98.
- GINORI LISCI, Leonardo: *Cabrei in Toscana. Raccolta di mappe, prospetti e vedute sec. XVI-sec. XIX*, Cassa di Ri-

- sparmio di Firenze, 1978.
- GIORGETTI, Giorgio: *Contadini e proprietari nell'Italia moderna. Rapporti di produzione e contratti agrari dal secolo XVI a oggi*, Torino 1974.
- : *Capitalismo e agricoltura in Italia*, Roma, 1978,
- GIORGI, E.: Attuali trasformazioni nella viticoltura italiana e loro accertamento, *Rivista di Economia Agraria*, Roma, XXII, 1967, N. 2, 49-63.
- GUICCIARDINI, F.: Le recenti agitazioni agrarie in Toscana e i doveri della proprietà (Memoria letta nell'adunanza del 3 aprile 1907 della R. Accademia dei Georgofili) *La mezzadria negli scritti dei georgofili*, Edizioni Agricole, 1936, 81-144.
- GUIDONI, E., MARINO, A.: *Territorio e città della Valdichiana*, Biblioteca di Storia della Cultura Urbana, Centri Antichi, I, 1972.
- IRPET: *L'agricoltura toscana negli anni settanta*. Rapporto sulle annate agrarie 1973-1978, Firenze, 1980.
- : *Nuovi contributi allo studio dello sviluppo economico della Toscana*, Firenze, 1980.
- : *Caratteri e prospettive dello sviluppo toscano*, Firenze, 1976.
- : *Rapporto sulla annata agraria in Toscana*, 1972.
- : *Relazione sulla situazione economica della Regione*, 1973.
- ISTAT: *Catasto Agrario 1929, Provincia di Siena*, 1934.
- JACQUART, J.: Histoire de la campagne toscane, *Tradition et changement en Toscane*, Armand Colin, 1970, 33-56.
- MANESCALCHI, Franco; *I toscani*, Casa Editrice Il Portolano, Firenze, 1979.
- MARAMAI, Rino: *La ferrovia Montepulciano Città-Fontago*, Editore del Grifo, Montepulciano, 1980.
- MARTINELLI, Gabriella e SFORZI, Fabio: La configurazione della struttura nodale in un sistema regionale: aspetti

- concettuali e metodi di analisi, in: IRPET: *Nuovi contributi allo studio dello sviluppo economico della Toscana*, 1980, 8. 1-8. 45.
- MELELLI, A., MONTILLI, G., PERARI, R. e RAMBOTTI, F.: Pastori sardi nella Provincia di Perugia: un nuovo aspetto della utilizzazione delle campagne. *I paesaggi rurali europei. Atti del Convegno internazionale indetto a Perugia dal 7 al 12 maggio 1973*, Perugia, 1975, 359-376.
- MENEGATTI, B.: *Ricerche geografiche sulle pianure orientali dell'Emilia Romagna*, Patron, Bologna, 1978.
- MIRRI, Mario: Mercato regionale e internazionale e mercato nazionale capitalistico come condizione dell'evoluzione interna della mezzadria in Toscana, Istituto Gramsci: *Agricoltura e sviluppo del capitalismo*, Roma, 1970.
- MORI, G.: La mezzadria in Toscana alla fine del XIX secolo, *Movimento Operaio*, VII, N. speciale, 1955, 506-510.
- PACCIANI, Alessandro: *La cooperazione agricola in Toscana. Vicende, problemi e prospettive*, Centro Studi Ricerche Economico-sociali della Toscana, Firenze, 1976.
- Pacini, Giovanni: Sviluppo dell'agricoltura ed occupazione. *Convegno Provinciale sulla Occupazione e lo Sviluppo Economico della Provincia di Siena*, Siena, 1976.
- PAZZAGLI, Carlo: Il paesaggio agrario della mezzadria in Toscana, *Città e Regione*, Sansoni, Firenze, Anno 2, N. 1, 1976. 43-53.
: *Per la storia dell'agricoltura toscana nei secoli XIX e XX*, Fondazione Luigi Einaudi, Torino, 1979.
: *L'agricoltura toscana nella prima metà dell '800. Tecniche di produzione e rapporti mezzadrili*, Leo S. Olshki, Firenze, 1973.
- PEDRESCHI, Luigi: L'allevamento ovino in Toscana: panoramica sulla congiuntura e le prospettive, *Bollettino della Società Geografica Italiana*, 11-35.
- PEDRINI, Leandro: Changements récents dans la famille rurale en Italie, *Actes du Colloque de Géographie Agraire*,

Madrid 23-27 Mars 1971 Aix-en-Provence, 1972, 121-122.

PESTELLINI, Tito: *La mezzadria e le sue consuetudini nelle provincie di Siena, Firenze e Pisa*, Accademia Economico-agraria dei Georgofili, Firenze, 1980.

PEZOAGLI, Giovanni: *Il Chianti, Memorie della Società Geografica Italiana*, Vol. XXVII, 1975.

PICCARDI, Silvio: *La trasformazione del paesaggio rurale e la tutela dei valori paesistici e culturali*, Istituto di Geografia dell'Università di Firenze, *Proposte per la Regione Toscana*, 1971, 25-52.

: *La trasformazione del paesaggio rurale e la tutela dei valori paesistici e culturali, Proposte per la Regione Toscana, 2, Atti dell' Istituto di Geografia, 2*, Università di Firenze, 1972.

: *La Valdichiana toscana. Ricerche di geografia antropica, Rivista Geografica Italiana*, LXXXI, 1976.

: *Un utile confronto: crisi e ristrutturazione di una fattoria del Chianti*, in: Menegatti, Bruno (a cura di): *Ricerche geografiche sulle pianure orientali dell'Emilia Romagna*, Bologna, 1979, 41-54.

REGIONE TOSCANA: *Zona 20, Valdichiana, Conferenza zonale dell'agricoltura*, Relazione del Comitato Organizzatore, Foiano della Chiana, 1973.

REPETTI, Emanuele: *Dizionario geografico-fisico della Toscana*, 6 vols. Firenze, 1833-1846.

RIGHINI, G.: *Il Chianti Classico*, Pacini, Pisa, 1972.

訳註：近代トスカーナ折半農経営の構造『農業経済研究』第四十八巻第一号「一九七六」一～一四頁。

SCARAMELLINI, G.: *Una valle alpina nell'età pre-industriale. La Valtellina tra i secoli XVIII e XIX: territorio, popolamento, economia*, G. Giappichelli, Torino.

SERENI, Emilio: *Storia del paesaggio agrario italiano*, 1961.

: *Il capitalismo nelle campagne 1860-1900*, 2a ed. Einaudi, 1968.

: *Note per una storia del paesaggio agrario emiliano*, ZANGHERI, R. (a cura di): *Le campagne emiliane*

- nell'epoca moderna*, Feltrinelli, 1957, 27-53.
- SERRAGLI, Pier Francesco: Le agitazioni dei contadini e l'avvenire delle mezzerie. Memoria letta alla R. Accademia dei geografi nell'adunanza ordinaria dell' 11 aprile 1920, *La mezzadria negli scritti dei geografi*, 149-192.
: *Un contratto agrario (la mezzadria toscana)*, Firenze, 1908.
- SHIMIZU, Koichiro: Un castello medioevale in Valdichiana, Valiano nel Quattrocento, *Population Mobility in the Mediterranean World, Studies in the Historical and Contemporary Aspects*, Mediterranean Studies Research Group, Hitotsubashi University, 1982, 59-71.
- SISMONDI, Jean-Charles-Léonard SIMONDE DE: *Tableau de l'agriculture toscana*, Genève, 1801
- SONNINO, Sidney: La mezzeria in Toscana, Italia, Vol. I, 1874 (in tedesco), *La mezzadria negli scritti dei geografi*, 53-80.
- TAKEUCHI, Keiichi: Caratteri del mutamento del paesaggio rurale della Valdichiana, *Population Mobility in the Mediterranean World, Studies in the Historical and Contemporary Aspects*. Mediterranean Studies Research Group at Hitotsubashi University, 1982, 33-51.
- 竹内啓一: メタウロ流域の農村景観『地理学評論』三六巻四号一九六三、一九二—二四頁
: イタリアにおける農村集落の諸類型『経済地理学年報』十一巻、一九六五、三三—四七頁。
: 南ヨーロッパにおけるブドウ栽培景観——農業地理学の方法論に関する試論『経済地理学年報』十七巻一号、一九七
一、四九—五八頁。
: アネニンの農村景観の変貌『地中海地域における集落形成の諸問題』一橋大学地中海研究会、一九八〇、八七—九九頁。
- TURCHI, M., GENNI, C.: L'economia senese dal 1951 al 1971 alla luce dei dati censuari, Unioncamera Toscana, *Quaderni di Economia Toscana*, Franco Angeli, 1974.

UNIONE REGIONALE DELLE CAMERE DI COMMERCIO INDUSTRIA ARTIGIANATO E AGRICOLTURA,

Centro di Studi e di Ricerche Economico-sociali della Toscana: *Le risorse economiche della Toscana*, Giuffrè, Milano, 1968.

VECCHIO, Bruno: *Tendenze evolutive del territorio provinciale nel dopoguerra*, Ente provinciale turismo di Siena, Multigrafato in proprio, Siena, 1979.

VIVIANI, Rita: *Montepulciano nell'800: Materiali per la storia di un territorio*. Tesi di laurea, Università degli Studi di Siena, Facoltà di Lettere e Filosofia, Anno Accademico 1978-79.

ZUCCAGNI ORLANDINI, Attilio: *Atlante geografico, fisico storico del Granducato di Toscana*, Segretario delle corrispondenze della Accademia economico-agraria dei georgofili di Firenze, 1832, Riproduzione 1974, Cassa di Risparmio di Firenze.

: *Indicatore topografico della Toscana granducale, ossia compendio alfabetico delle principali notizie di tutti i luoghi del Granducato*, Firenze, 1856.

(昭和五七年四月三〇日 受理)